

KEIO SFC REVIEW

No. 64

SUMMER 2017

特集

Diversityの「多様性」

特集／対談

杉本 なおみ × 杉原 由美
秋山 美紀 × 小島 希世子
太田 喜久子 × 大木 聖子
飯盛 義徳 × 小池 智子

連載

私にうつるSFC
私の推薦図書／國枝 孝弘
sfcism／野村 訓市
When I was young／
桑原 武夫



撮影秘話

5月某日、サブウェイにて行った学部生鼎談の取材。非常に和やかな雰囲気の中、協力していただいた学部生3人にDiversityの「多様性」についてじっくりと語ってもらいました。

(編集部)

特集

02 Diversityの「多様性」

04 学部生鼎談

吉田 遥 (看護医療学部4年) × 坂本 拓馬 (総合政策学部4年) × 野澤 幸男 (環境情報学部2年)

08 大学院生インタビュー

後藤 博 (政策・メディア研究科修士課程)

佐々木 秀夫 (政策・メディア研究科後期博士課程)

12 対談

杉本 なおみ (看護医療学部教授) × 杉原 由美 (総合政策学部准教授)

秋山 美紀 (環境情報学部教授) × 小島 希世子 (株式会社えと菜園 代表取締役)

太田 喜久子 (看護医療学部教授) × 大木 聖子 (環境情報学部准教授)

飯盛 義徳 (総合政策学部教授) × 小池 智子 (看護医療学部准教授)

連載

28 私にうつるSFC

30 私の推薦図書

國枝 孝弘 (総合政策学部教授)

32 sfcism

野村 訓市 (編集者 / 1997年総合政策学部卒業)

36 When I was young

桑原 武夫 (総合政策学部教授)

40 From Editor

Diversityの「多様性」

【Diversity：多様性】

Diversityと聞き、あなたは何を思いつくだろうか？ 働き方やワークライフバランス、国籍や宗教、ライフスタイル、価値観。いろいろなものに、Diversityがある。このように人々はさまざまな多様性をもちながら、地域で暮らす。社会で一人ひとりが豊かに生きていくために、私たちは社会的包摂（インクルージョン）を目指していくのかもしれない。

この特集ではSFCの学部生、大学院生をはじめ、Diversityについての研究、実践をしている教員や卒業生にさまざまな切り口で語ってもらった。

学部生鼎談

私たちが考えるDiversityとInclusion

吉田 遥(看護医療学部4年)×坂本 拓馬(総合政策学部4年)×野澤 幸男(環境情報学部2年)

大学院生インタビュー

実践とDiversity

後藤 博 (政策・メディア研究科修士課程)

佐々木 秀夫 (政策・メディア研究科後期博士課程)

対談

Diversityと異文化コミュニケーション

杉本 なおみ (看護医療学部教授) × 杉原 由美 (総合政策学部准教授)

Diversityと福祉

秋山 美紀 (環境情報学部教授) × 小島 希世子 (株式会社えと菜園 代表取締役)

Diversityと防災

太田 喜久子 (看護医療学部教授) × 大木 聖子 (環境情報学部准教授)

Diversityとまちづくり

飯盛 義徳 (総合政策学部教授) × 小池 智子 (看護医療学部准教授)

研究をしています。最後一年はしっかり研究をするつもりです。

野澤幸男（以下、野澤）…環境情報学部二年の野澤幸男と申します。私は目が見えません。完全に見えなくなつてから十六年程たちます。プログラミングを独学し、十年前から視覚障がい者向けのソフトウェアを開発しています。最近のソフトは視覚障がい者には見づらいという問題があつたので、画面の拡大やコントラストを調整できるようにしたソフトを今年の四月に開発しました。

所属しているコンピュータを専門とする村井純研究会では、コンピュータネットワークを中心に研究活動をしています。例えば、会社のホームページで連絡先がテキストではなく画像になつていことがありますが、視覚障がい者は普段パソコンの読み上げ機能を利用しているのでも、画像を貼るにしても、プログラムが読める形でテキストが指定されている必要があります。そうでないと連絡先が分からないことが結構あるんですね。画像にテキストが付

ていないことも問題ですが、修正してくださいとお願ひしても修正してくれない人がたくさんいることも問題です。現在はこれに対してどのようにアプローチしようかと考えています。

●障がいとテクノロジー
——ダイバーシティについて野澤さんはどのような問題があると思われるのでしょうか？

野澤…僕は、日常生活の中でやりたいことをやりたいようにできないことが多いんです。

見えないという理由でできないと分かつた時「これは問題だ」と思います。例えば、視覚障がい者は情報処理の上級レベルの試験を受験できません。また、人の対応の問題もあります。こちらが「見えないんですけど」と言つたら「見えない人はだめです」とつっけんどんに返されたり、何をする前にも「あなたには危ないからだめです」と言われたりすることがあります。

自分ができないことをテクノロジーを用いて工夫して、自分にもで

きるようになれば楽しい。「ああできないね、残念」つて終わらせるのはもつたいたいと思つています。コンピュータやインターネットもあるので、人と繋がることは難しくありません。それらを駆使し工夫してできないことをできるようにすれば、すごく嬉しいです。ゲームみたいな感覚で「なんとかしてできるようにならないかな」と思い、試行錯誤して「あ、できた!」というその達成感を原動力にしています。

坂本…野澤さんに伺いたいのですが、野澤さんはご自身の周りの視覚障がい者の方とはマインドセットが異なると思いますか？ 野澤さんはチャレンジ精神も旺盛で特別な感じがします。

野澤…障がい者の中にはTwitterで「私はこんなに大変なの」と呟いている方もいます。マインドセットはやはり障がい者の中でもさまざまだという印象をもちます。

視覚障がい者には、もともと見えていた人が失明する中途失明のひと僕のように物心ついた時に既に失明

●海外の障がい者支援の現状について

坂本…パラリンピックに関わる機会があり、日本と海外の障がい者への認識の違いを感じました。特に英語圏の先進国では障がい者を「チャレンジド」という言葉で形容し、ネガティブなイメージは少ないようでしたし、障がい者に対して差別扱いをしている様子は見ませんでした。も

学 部 生 鼎 談

私たちが考える Diversity と Inclusion



吉田 遥 (よしだ・はるか)
看護医療学部4年
開智高校出身

坂本 拓馬 (さかもと・たくま)
総合政策学部4年
川越高校出身

野澤 幸男 (のざわ・ゆきお)
環境情報学部2年
筑波大学附属
視覚特別支援学校出身

この鼎談では学内外でさまざまな活動に励んでいる吉田遥さん(看護医療学部四年)、坂本拓馬さん(総合政策学部四年)、野澤幸男さん(環境情報学部二年)の三名にDiversityに関する率直な考えを述べてもらった。活動を通して、一体どのようなことを見たり、感じてきたりしてきたのだろうか。

●今行っている活動について
——自己紹介をお願いします。

吉田遥 (以下、吉田)…看護医療学部四年の吉田遥です。私は現在アフリカ医療研究会に所属しています。この研究会は国際保健が専門の藤屋リカ先生の指導のもとで活動しています。さらに、教育が専門の長谷部葉子研究室、建築が専門の小林博人研究室の学生とも連携をしてプロジェクトを進めています。

実際に私はこれまでにコンゴ民主共和国へ二回渡航しました。医療チームの具体的な活動は、現地での子どもたちへの健康診断と栄養や公衆衛生をテーマにしたワークショップの企画と実施です。子どもたちだけではなく、学校の先生や母親も対象にしています。今年は医療チームは地域の方や母親を招いた授業参観形式のワークショップと大人への健康診断を企画し、私たちの活動を地域の大人たちにも知ってもらおうと思つています。

坂本拓馬 (以下、坂本)…総合政策学部四年の坂本拓馬と申

します。僕はSFC入学後、米国大使館の主催するビジネスコンテストの運営に携わりました。そこでビジネスの世界に興味湧き、スタートアップに参画したり大企業とコラボレーションしたプロジェクトをやってきました。

一年生の秋学期から教育政策を専門とする鈴木寛研究会に入り、そこで品川女子学院と一緒にプロジェクトを行うなど対外的な活動を続けてきました。また投資ファンドでインターンをしていましたが、来年からはその外資系の投資銀行で働く予定です。現在は主に卒業プロジェクトを進めていて、日本企業のアウトバウンド型M&Aの失敗要因について





吉田…その問題を抱えている人へ積極的にこちらが歩み寄る必要もあると思っています。実習を通していろいろな人と関わってきました。中には、自分の気持ちを表現することが難しい方もたくさんいらっしゃいます。また、精神障がいをもっていることを知られないために、他者との交流を拒んだり、交流の場にも寄らなかったりする人も珍しくありません。自分から壁をつくっている人もたくさんいらっしゃいますね。

そのような時、気持ちをほぐしてあげて少しでも前向きな気持ちがあるようにサポートしたり、その気持ちと共有したりすることもあります。

野澤…やはり、支援を必要とする時はあるんですよ。手紙が家に届いたときなんて、誰からの便りかもその内容もまったく分からず困るんです。たまたま僕は寮生活をしているので、寮長さんに代わりに読んでもらったり、友人に連絡して「今からPCのカメラに手紙を映すから読み上げてくれないか？」と頼んだりします。そういう時はやはりインターネットが解決の手助けをしてくれるんですよ。パソコンが調子が悪くなった時も「こつちの画面を共有するから、そつちから操作してくれないか？」とお願いします。東京で助けてくれる友人がいればアメリカにも助けてくれる友人がいるんです。

ともアメリカは移民文化ですし、そういう意味では他者への許容度も高いと思います。ロンドンでパブリックは世間の注目を浴びていました。日本と比較して会場も観客でしつかり埋まっていました。その様子を見たら、障がい者に対する市民の偏見や差別意識が日本より少ないのではないかと思いました。

野澤…欧米諸国は人的配慮はかなり進んでいるけど、公共施設などの物的配慮は日本の方が進んでいると思います。

吉田…私もそのように感じることはありませんでした。つい先日イタリアに旅行したのですが、むこうは歩道がほとんど石畳なんですね。友人と「ここは高齢者や障がい者に不親切だね。段差もあるし、道もがたがたしているし」と話題になりました。日本の道路は地域差はあるかもしれませんが、綺麗に舗装されていると思います。海外に旅して改めて日本の住みやすさを実感します。

発展途上国はコンゴについてしか分からないのですが、コンゴで障がい者への差別や障がい者が不遇な扱いを受けている現状を目の当たりにしました。現地にはイタリア人のママ・ココという方が無償で設立・運営していた地域では大きな病院兼孤児院の施設があります。その施設に併設した障がい児のための施設があります。そこで療養している子どもは重度の身体障がいをもっていて、その子どもたちへの差別が根強いようでした。現地の人の中には、その施設を快く思わない人もいるようで悲しくなりました。私たちが活動しているのは、割と安全で裕福な方が住んでいる地域だったのですが、水も通つておらず、私も渡航すると一週間は髪を洗わないくらい水が貴重です。施設の子どものくらの頻度でお風呂に入れてもらっているか分かりませんが、パンツも履かずにワンピース一枚をべろんと着ている子や、ハエがいつぱいたかつていてもそのまま寝かせられている子がたくさんいました。さまざまな家庭の事情で施設に保護されている子どもたちに会って、本当に衝撃を受けましたね。やはりまだまだ途上国では差別は残っていると実感しました。

坂本…野澤さんは、将来に対する不安など、どのように考えていますか？

野澤…僕は自分を自慢するわけではないですが、客観的に見て視覚障がい者の中でもだいたいのことはできていると思うんです。正直なところ、見えなくて不安だと思ったことはないんですよ。

吉田…いろいろな視覚障がい者の人と交流会はあるんですか？

野澤…ありますよ。例えば、パソコンでの音楽の作曲の仕方を教え合う交流会もあります。僕は行ったことはないのですが、仕事をしていて困っていることをシェアする会があるようです。そこでは、それぞれの体験談を共有し知恵や解決策を出し合い、結構盛り上がるらしいです。ただ、そういう場所に来ている人って、そもそも問題を解決しようとする意識をもっているんですよ。障がいをもち、そのような会に足を運ぶのも難しい人にどのように働きかける必要があるのでしょうか。

吉田…アクションを起こすって大事ですね。

野澤…「僕は目が見えなくて、これができるから……」とか言わないで「ちよつとこれできなくて困ってるんですけど、見てもらえませんか？」みたいな感じで頼むと手伝ってくれます。そういう自分を卑下しない態度も良かったのだと思います。

● Diversity を超越した人との関わり方

——「何かお手伝い必要ですか？」という声かけ一つでも気に障る方もしれば、その声かけを待っている方もあるかもしれないですね。どのような声かけが必要なのでしょう？

野澤…障がいの有無は関係なく、人と人の関わりが適切に行われているかどうかなんです。例えば、相手が視覚障がい者だからといって駅のホームで腕をいきなり掴んで電車に引きずり乗せていいということはありえない。見知らぬ人の手に突然触れるのは障がいの有無に関係なくおかしいことです。逆に「お困りです



坂本…問題を抱えている人と解決しようと支援する人が歩み寄らないと根本的な解決は難しいですよ。例えば支援者の視点だけですべてを解決しようとすると問題を抱えている人にとっては押し付けがましく感じることだってあるだろうし、逆に「問題を抱えている人の問題だから自分たちでなんとかすべき」みたいな考えもあるかもしれない。お互いが歩み寄る機会が必要だし、それを許容する空気もすごく大事だと思います。お互いが歩み寄って初めてインクルージョンが進むのではないでしょう。

か？」と話しかけたのに「自分は慣れているから別にお手伝いはいらないです。何なんですか？」と無愛想な対応もよくない。いくら自分が声をかけてもらうことが多いからといって、人として常識はずれの対応をするのはおかしいと僕は考えています。

「おせっかいと思われるのが怖くて声をかけられないんですよけど、どうすればいいですか？」と質問されるのですが、すすい歩いていて大丈夫そうならほつといていいと思いますし、明らかに困つてそうな人に声をかければ相手の方も嬉しいのではないのでしょうか。なので、相手が見える見えないかではなく、困っているか困っていないかなどで判断すれば良いのではないかと、とお伝えしています。

吉田…問題は障がいの有無や国籍や文化の違いなどではなくて、個人の付き合い方なんだなと感じました。結局相手が誰であつても、人と人との関わり方であることには変わりはないんですよ。

(構成…坂本美佳)

●**効率化重視への葛藤から考えたこと**
——ダイバーシティとインクルージョンに関して、現在どのような問題があるでしょうか。

私は病気になってから、効率化と経済活動の問題について考えています。私が発症した脳卒中は、神経細胞が一度死滅してしまうと戻らないので完治することはないとされているんです。しかし、医師であれば患者を目の前にしてなんとか救いたい

と思うでしょう。でもそこには思うようにできない現実があるのだと思います。医療や福祉は社会保障制度などの政策に則って、社会的インフラとして提供されていますので、医師の思いだけでは治療やケアはできません。効率化と経済活動の持続性の問題は無視できないからです。医療や福祉は無償ではありませんので、限られた財源の中で多くの人を救わなければなりません。そこから効率化という考え方が生まれます。効率重視の考え方は無駄を排除する方向にも働くのですが、その無駄に該当する対象に利用しているものやサービスが含まれると、不利な影響を受けてしまうのです。資源は有限なので仕方がないことなのですが、現実にはそういうことがあると気付かれました。

そしてこれも同じように言えることなのですが、最良の選択のための優先順位を付けざるを得ない場合があります。災害や事故で医師が優先順位を付けて対応する「トリアージ」が代表的ですね。限られた時間の中で最大の救命活動は重要ですし、この考え方は肯定すべきものだと思います。しかし一方で、そこにはやはり救えたはずの命もあるように思えてなりません。今後もっと救えるようにするにはどうしたらいいのか。

この世界は、内側と外側に二分されると思います。その内側にある既存の価値の見直し、新たな価値の創造に気を付けてみてはどうかと思います。

内側、それは人であったり、組織であったりもすると思います。「身内」なんて言う言葉がよく使われています。とかく、内と外に分け、内側の利益を偏って優先すると外側の排除が自然と生まれるのだと思います。もし内側から既存の価値を越えるような新たな価値が創出される、それは外側にはみ出すことになりますよね。これが内側と外側の障壁を低くする、インクルージョンになると思うのです。新たな大きな価値で外側を取り込んでいく。これが、ダイバーシティ、多様性の取り込みにも繋がるのではないのでしょうか。

(構成・藤井咲妃)

自分が納得する選択をして、それを実行に移してほしいですね。その過程で迷うことも多くあるかもしれませんが、後悔はしないはず。迷っても自分が納得するまで考え抜くということは、新たな価値を発見し、次の道への突破口になることも考えられます。既存の価値を上回る新たな価値の創造、提供はきつと多くの人が望む豊かな未来に繋がることでしょう。

——読者へメッセージをお願いします。

脳卒中などの病気によつて障害を抱えるようになって、コミュニケーションの交流を避けるに積極性を維持するには、これまでとは違う「障害」を受け入れる必要があります。こうした内側の価値の転換・再構築がヒントを与えてくれています。

実践とDiversity



大学院生インタビュー

大学院生インタビューでは、後藤博さん（政策・メディア研究科修士課程）、佐々木秀夫さん（政策・メディア研究科後期博士課程）のお2人に話を伺った。お2人は研究の傍ら、実践家としてフィールドで活動されている。そのきっかけや現状の問題に対する考えについて語ってもらった。

後藤 博 (ごとう・ひろし)

政策・メディア研究科修士課程
千里高校出身

●**社会を変える橋渡し役に**
——大学を卒業されてからのご経歴を教えてください。

一九八六年四月、第一生命に入社しました。法人の情報処理、法人部門の業績管理の部署から転勤を重ね、営業の最前線である企業に福利厚生コンサルタントをしたり、営業拠点への指導をしたりしていました。そんな仕事に勤しんでいた時、突如脳卒中を発症したんですね。それからは大変でした。倒れる前の当たり前は激変し別世界に追いやられました。日常生活の中でもままならぬ不自然な動作が支配的になり、いろいろな動作のやり方を変える必要がありました。そのための配慮もあって、配置換えがあり、第一生命経済研究所に転属となりました。

脳卒中の患者の大半は高齢者で、医療や制度に不満があったとしても、それを表だって口に出す人は多くありません。そのような現状を目の当たりにしました。そこで、私は制度を利用側の患者と制度を考える側の学識者や政治家、まちづくりを考える人たちの橋渡し役の一助になればいいなと思ったのです。そのため働きながらも勉強する必要があるだろうと思い、SFCの政策・メディア研究科に入りました。

——脳卒中の経験を通して、ダイバーシティとインクルージョンについて感じられたことはありますか？

これまでにダイバーシティとインクルージョンの実現のために大きく三つの克服すべき課題や問題意識をもちました。

一つ目は支援者と要支援者の更なる相互理解が必要だと考えています。脳卒中を患い健常者から障がい者となつて自分のいる世界が大きく変わりました。当然病気によつて失われた身体機能をリハビリで回復しようとするのですが、その過程で支援する側と支援される側の二つができてしまいます。そこで既に妙な区切りが生まれてしまふんです。支援するもの、支援されるもの人です。それぞれのような人生を歩んできて、どのような価値観をもっているのか、人それぞれが違うものを背負ってきているので価値観が異なることも理解した上ではじめて、適切な支援に結び付くと感じました。

二つ目はこの両者は敵対するものではないのだという問題意識を持ち、どのような支援体制が望ましいかについて考えようと思いました。いわゆる社会的弱者の世界に踏み入れ、そこで多くの支援を受ける形になるのですが、支援者も要支援者もいろいろな人がいるのです。時には

もともと私は横浜の郊外の新興住宅地で育ち、周囲には森や沼が点在していました。小学生までそういう自然の中で遊んでいた影響もあったのでしよう。農や自然と関連させた事業を候補に考えていました。また、当時は働いてしつかり経済的にも自立できる場にこだわっていました。ある時、作業所で仲良くなったメンバーさんを食事についたのですが「お金がないから遠慮します」と断られたのです。話を聞いてみるとメンバーさんの日給は百円〜百五十円程度。一日約五時間働いているので時給にして二十〜三十円程度だったんです。所長に「いくらなんでも低すぎるのでは？」と聞くと、どここの作業所もこの程度の水準、との答えでした。企業や社会常識的にも工賃水準は想

●価値のあるもの
——どんな思いがあつて都筑ハーベストの会を立ち上げたんですか。

るメンバーさんには本当にいろいろなことを学ばせてもらい、力をもらいました。二十代でのメンバーさんとの出会いに私の人生は大きな影響を受けましたね。一方で、世の中の精神障がい者に対する捉え方と実際の違いを考えるうちに、小規模作業所の活動にはまり、都筑ハーベストの会を立ち上げるきっかけになりました。

像を絶するもので、この事実には正直あぜんと思いましたね。

当時の小規模作業所はほぼ室内での内職作業ばかりでしたが、先ほどの私の幼少期の体験も手伝い、室内だけではなく自然と触れ合える「農」を実践する作業所づくりを構想しました。都筑区は、横浜市でも比較的に農地が多いエリアでしたが、農地を借りるのには本当に苦労しました。耕作放棄地でも先祖代々の土地でするので、よそ者には簡単には貸してくれないのです。現在のような仲介制度もありませんでした。最初の畑は地元のとつてを何人も経てようやく貸していただける人にたどり着きました。作業所ができるまでの約二年間は地下鉄仲町台駅近くの畑で週末体験農場を企画し、そこで試行錯誤で土いじり・野菜作りをしていました。同時に、精神障がい者が炎天下・冬の極寒のなかで農を行えるのかなどを確かめながら、仲間づくりを行いました。そして当時は「時給二十円の世界」から脱却し、きちんと稼げる事業体を目指し、地域での直販や付加価値の高い野菜・加工品作りなどもしたいと考えていました。

——都筑ハーベストの会で活動する上で大切にしていることはなんですか。

あることをきっかけに「農」に對

する考え方が変わりました。退院したばかりの方が、お母様と一緒に見学に来られたときです。本人は終始うつむいたまま、一言も話さず、お母様が代弁されていました。最後にお母様が涙を流され、初日はお帰りになりました。ところがある日、本人からおはようございます、と挨拶をかけられるようになり、仲間と会話をしたり、笑いをもらすようになったりとなつたりと変化していったのです。日々コツコツと働き、自然の中で無心に体を動かすことと、仲間との繋がりが、おのずと心の回復に至らせたと感じました。結局、その方はここを巣立って働きに出るようになりました。

他にも元気になつて生きることによって前向きな気持ちに変わつていく、そういうメンバーさんをたくさん見て、お金を稼ぐことだけではなく「農」や農のある「場」がもつ人を変える力は何なのか、ということに関心が向くようになりました。

「農」で感じるもののひとつに、現代人の時間と自然の中の緩やかな大きな時間の流れとのギャップが挙げられると思っています。現代人は、一定の時間内で物事を解決すること、を当然求められます。しかし農園では、皆それぞれのペースで自然と向き合い、ある時には格闘しながら「頭をからっぽ」にしている。そういう

●地域に広がる「場」
——読者に一言お願いします。

環境に身を置き時間を共に過ごす仲間がいる場で、徐々に自分を取り戻していくことをメンバーさんの様子や語りなどから感じるようになりました。

核家族化・高齢化社会の中で、不自由や孤立といった問題は若者から高齢者、障がい者まで誰もが抱える問題です。これからの時代は誰でも気軽に生き来ることができ、緩やかな繋がりをもてる地域の「場」が必要だと思います。「農」はこのように多世代が繋がり、自然の中で創造的な気持ちで集える場が「農」を切り口に実現できればと考えています。ここで言う「緩やか」とは身内だけではなく、誰もがオープンに気軽に、という意味も込めた言葉です。来年開所目標で、横浜市青葉区の寺家町で耕作放棄地の棚田と里山を生かし、自然と人、人と人が緩やかに繋がる創造的な居場所をテーマに、地域活動支援センター新規設置要望を横浜市に申請中です。読者の皆さんが活動に関心をもっていただけで嬉しいですね。

(構成・平澤 茉衣)

実践とDiversity



大学院生インタビュー



佐々木 秀夫 (ささき・ひでお)

1991年慶應義塾大学経済学部卒業
現在、政策・メディア研究科後期博士課程
(特非) 都筑ハーベストの会 理事長
聖光学院高校出身

●メンバーさんとの出会い
——佐々木さんのご経歴を教えてください。

一九九一年に慶應義塾大学経済学部を卒業後、民間企業で働く傍ら、精神障がい者の小規模作業所でボランティアを始めて今に至っています。経済学部といつても都市経済学、その中でもスラムやアジアの農村、人や街の裏といった文化人類学的な分野に関心がありました。自分自身の将来や、心の中にある種の不安や世の中に対する漠然とした疑問が常にあつたんでしようね。ある時、精神医学は人を、文化人類学は街や社会をフォーカス対象としている、対象の違いはあるが両者は似ていると書かれていた『精神医学と文化人類学』(金剛出版、大平健・町沢静夫編)を読みました。類似した内容の本を読み続けるうちに、精神科医という職業に憧れ、医師を目指したいと思った時期もありました。実際に精神障がいのある人と実際に現場で触れ合いたいと思い、探した結果、ボランティアセンターで小規模作業所という存在を教えることができました。そして、横浜市の西区にある作業所に見学に行くことになりました。

今でも小規模作業所との運命的な出会いは覚えています。作業所の扉を開けると、そこには二十人ほどの利用者(利用者のことをメンバーさ

んと呼んでいます)が約五メートル角の机を囲みながら電子部品を組み立てる内職作業を黙々としていました。その輪に入れてもらい一緒に作業をしたのです。するとメンバーさんがコーヒを入れてくれたり、話しかけてくれたり、皆さんとても気を遣ってくれたんですよね。三十分、一時間と時を共にするうちに、不思議なことに何か今までは違う世界に入り込んでしまったのです。

医師を目指した時期もあったと言いましたが、小規模作業所では薬は処方できないかもしれないですが、このような人たちと寄り添って生活を共にすることができ、自分に自身の心にも光が見えたような気持ちで、ずるずると引き込まれていきました。その作業所にはいろいろな人が通っており、メンバーさんに何う話は私にとつてはすべて新鮮で驚きに溢れていたんです。戦後、特に高度成長期に、日本の精神医療は入院中心主義の医療が国策で進められました。一方で、精神科のクリニックはほとんどなく、その作業所にいた方々も精神科病院に余儀なく二十年、三十と長期にわたり入院していた方が大勢いました。一人ひとりの生き方は私の想像をはるかに超えていて、さまざまな生き方があることを知りましたね。とても困難な話でも温かみをもつて語り、接してください

杉原…SFCでたくさんの留学生や帰国生に接しています。環境の変化によって新たな価値観に触れて葛藤が生じるために、彼らのアイデンティティが揺れ動くのは自然なことです。大抵の場合は、問題視する必要はないと思います。

一方で、彼らは外見によって先入観をもたれてしまうことがあり、私はこちらの方が問題だと思っています。日本に興味をもち、たくさんエネルギーをつぎこんで日本語を学

●マジリティとマイノリティ、どちらにとっても良い環境とは

——杉原先生はSFCで日本語教育に携わっておられますが、いろいろな背景をもっている学生自身のアイデンティティが揺れ動くといったような状況はあるのでしょうか？

に捉える方向性に向かうことが課題です。過去には、ダイバーシティは肯定的には捉えられていませんでした。例えば、日本社会の中で同化の圧力が働き、朝鮮半島出身の人たちは日本名を使わざるを得なかったことがあります。

ぶ留学生たちがいます。しかし、外見が東アジア系でなければ、彼らが頑張つて学んだ日本語で話しかけても、英語で返事が返ってくるが多々あるんです。そのような経験が度重なり、自分は日本社会のメンバーとして受け入れられないのだという失望と葛藤を抱えます。日本に住んで日本語を学習している人たちがこのような思いをもつことは、日本社会にとって大きな損失です。

英語で返事が返ってくる背景には、外国人は英語、日本語は日本人のもの、という固定観念があるようです。こうしたイメージを変えていくには、日本社会のマジリティへの働きかけが大事です。それができれば、日本語学習者にとって日本社会はもつと居心地の良いものになるでしょう。

私の専門分野である日本語教育においては、私は、日本語を学んでいる学習者を日本人に同化させるのではなく、彼らの自己実現とエンパワメントを支えるような日本語学習環境をつくりたいです。



杉本 なおみ
(すぎもと・なおみ)
看護医療学部教授
専門はコミュニケーション学
(医療コミュニケーション学、
コミュニケーション教育学
異文化コミュニケーション学)

——見かけで判断して良かれと思い、日本語が話せる外国人に英語で話し続けてしまうこともあります。このような場合どういった解決策がありますか。

杉本…そうしたことを防ぐためにマタニティマークのような、外国の方が付ける「日本語で話しかけてくだ

対談

Diversityと異文化コミュニケーション

杉本 なおみ × 杉原 由美

この対談では、杉本なおみ看護医療学部教授×杉原由美総合政策学部准教授、秋山美紀環境情報学部教授×SFC卒業生の小島希世子さん、太田喜久子看護医療学部教授×大木聖子環境情報学部准教授、飯盛義徳総合政策学部教授×小池智子看護医療学部准教授のSFCの教員と卒業生からなる8名に話を伺う。それぞれの視座からDiversityの現状と展望について語っていただく。

●ダイバーシティの現状について

——ダイバーシティについてどのように考えておられますか。

杉本なおみ（以下、杉本）…
今の日本は「多様性を受け入れよう」という気持ちがあっても、それに身体がついていかない」という段階にあるのではないのでしょうか。特に一定の年齢以上の医療職の場合、障がいのある人や外国人と、患者ではなく同僚やクラスメートとして協働した経験が少ないので、距離の取り方が分からないということがあるかも知れません。例えば以前、インドネシアからの看護師を受け入れた病院で、イスラム教の戒律を「好き嫌い」程度にしか考えず「少しくらいなら問題ないだろう」と豚肉料理店でもてなしたとか、それとはまったく正反対に、別の病院では院内食堂のメニューから豚肉料理を全廃したという話を聞いたことがあります。

どちらの場合も当事者に悪意があるわけではないだけに、もう少し上手に異文化と折り合いをつけることができたのではないかなと思います。

杉原由美（以下、杉原）…
日本では、ここ最近在留外国人が増えてきて、見える存在になってきつつあるように感じています。今は、人々がこの環境の変化を受け入れ、日本に言語的文化的に多様な背景をもつ人がいるんだという認識を共有するプロセスの只中にある、と捉えています。その多様性をポジティブ



杉原 由美
(すぎはら・ゆみ)
総合政策学部准教授
専門は日本語教育学、多文化教育、
エスノメソドロジー・会話分析



さいマーク」というのがあったら良いですね。

杉原…ツーリズムには実際にそういうマークがあるんですよ。日本語を話したい海外からの旅行者に、バッジをつけてもらって、日本語での交流をはかっている町があります。ただ、旅行者でない場合を考えると、重要なことは、見かけで判断することではなく、その人の話していることばを、ちゃんと聞くことだと思えます。相手に個人として関心を払って、ことばに耳を傾ければ、日本語で話している人に対して、英語で答えることは起こらないと思います。

杉本…外国人が日本語で話しかけても英語で応答する日本人をたまに街角で見かけます。「欧米人といえば英語！」という思考回路から抜け出せなくなっているだけなのかも知れませんが、その裏には「外国人に日本語を話せるわけがない」というねじれた優越感が潜んでいる場合もあるように感じます。

杉原…その「日本語は難しいから外

国人は日本語を話せない」という、日本のマジョリティが持つている優越感が、日本語を頑張って学んでいる人たちのエンパワメントを阻んでいるように見えます。こうした日本語や英語に関する思い込みが変わるように、日本社会に働きかけていきたいんです。また、自分の価値観から判断すれば良いはずのことが、相手にとつても良いことだとは限らない、と自覚することも大事ですね。

●多様性があるからこそ、成長する
——医療従事者は相手の多様性を理解して受容していくことが大切なのでしょうか？ また、インクルージョンを進めていくためにはお互いの歩み寄りが必要なのでしょうか？

杉本…「歩み寄り」妥協」というよりも「共生」共に生きる」でしょうか。実は米国の大学でスピーチを教えていた時にとっても興味深い経験をしたことがあります。私の担当するクラスに偶然聴覚障がいのある学生が割り当てられました。彼女は読唇術が使えるので、他の学生とまったく同じように他の授業に出ていたの

ですが、私のクラスだけは私の英語の発音が正確でないために理解するのが大変そうでした。すると彼女が「あなたが正しく発音できないと困るのは私だから！」と私のオフィスアワーにやってきて正しい発音を教えてくれるようになりました。というわけで私は聴覚障がいを持つ学生からLとRの発音を学んだことになりました。これってすごいことですよ。

杉原…杉本先生のお話を聞くと、良い意味で効率を求めないというのも大事になってきますね。当事者同士での解決がエンパワメントに繋がるという認識がないと、効率だけを優先してしまい問題の本質を捉えられなくなってしまうと思います。

杉本…単に効率を優先するのであれば、この学生を他のクラスに移せば済むことだったと思います。ところが先生達の反応は「この先の人生、この学生は外国人を避けて生きていくわけにはいかないのだから、早い段階でこういった対処方法を身に付けさせることこそ真のエンパワメン

トだ」というものでした。実に腹が据わっているというか、さすがは多様性の国と思つた記憶があります。だからこそ教員となつた今、私は留学生生に対して、多少厳しくともこれから先日本で生きていくための術が身に付くような接し方をするように心がけています。

そう考えると、障がい児と健常児のクラスを一緒にするべきなのか、それとも特別学級があつた方が良いのかという判断も難しいですね。

子どもは吸収が早いので、障がい児を特別扱いせず幼少期から健常児と一緒に学ばせた方が良いという考え方があります。しかし本来最優先すべきは、その子にとつてどちらの環境がより適しているかという判断だと思っています。

杉原…そのバランスが大事なのではないのでしょうか。理想は多様な児童がお互いに学び合つて共生することです。しかし、ずっと一緒に、必要な支援がなされないのは問題です。このことは、海外から日本の学校に来る外国人児童生徒にも当てはまります。海外から来て日本語指導の必

要がある子どもが多く在籍する小学校や中学校には、国際教室というものが設置されます。外国人児童生徒は、普段は一般学級で過ごしますが、特別に日本語指導を受ける時間に、その国際教室に行きます。

その国際教室がどのような場所と見られるかが重要です。「日本語ができない人が行く所」というネガティブなイメージではなく「多様な言語や文化の背景をもつ児童が集う

場所」だという肯定的なイメージで見られれば、一般学級の児童と良い学び合いが起こる環境ができるでしょう。社会全体のダイバーシティの認識がポジティブな方向に行く流れをつくらなければ、ネガティブな見方が出てきてしまいます。

●「相手に興味をもつ」ことから始める相互理解

——ダイバーシティを受け入れていくためのポジティブな流れを作るにはどうすれば良いのでしょうか。

杉原…インクルージョンとエクスクルージョンという対立した考えがあります。それぞれ包括と排除を意味します。例えば「日本といえば日本人、日本人といえば日本語」という考えは誰かを排除してはいないのでしょうか。日本社会のメンバーが日本人のみであるかのような言い方は誰かを排除してはいないのでしょうか。この考えは境界線を作っていないのでしょうか。日本人というくくりが作られると同時に、そのくくりから出されてしまう人がいるのです。このインクルージョンとエクス

クルージョンの対立する概念は、境界線に気付かせてくれる重要な考え方だと思っています。

杉本…日本人が日本人と同等の日本語を話す外国人に「あなたの日本語、お上手ですね」と言つて褒めたつもりでも、相手にとつては距離を取られているように感じる。距離を縮めているようでも、本質的には相手を遠ざけてしまっているのが難しいところだと思っています。

杉原…そうですね、同じことを日本人にはしないでもんね。外国人の場合のみ日本語を褒めるのは相手に境界線を引いている証拠ですね。この境界線はエクスクルドされた相手にとつては鮮明に見えるものなんです。

杉本…褒めている側の気持ちが問題なのではなく、結果としてどのような現象を生んでいるかが問題ですね。その行為が自己満足になつてないか考えを改める必要があります。

昔の日本社会にも多様性がありましたが、同調圧力が強かつたために、

それが顕在化しませんでした。多様性のある社会から目を背けていたんですね。だから、日本人が多様性に慣れていないから仕方ないというのは言い訳です。意図的に目を背けていた事実を省み、変わつていかなければいけないと思つています。

これはあらゆるダイバーシティの意味で言えますが、そもそも相手の個性に興味をもつことが肝心だと思うんです。そうすれば、日本語で話しかけられても英語で返すといつたマニユアル的なことに陥らないはずで。障がい者に対して、人となりを知るための歩み寄りをしないうちから「この人は何もできないはずだ」と思い込めば、本人の意思に反した余計なことをしてしまうんですね。相互理解を図るときのスキルは、どの分野でも共通していることだと思っています。

(構成…秀島佑菜)

Diversityと福祉

秋山 美紀

×
小島 希世子

●「お互い様」のコミュニティへ

秋山美紀（以下、秋山）…
初めて小島さんの講演を聞いたのは三年ほど前になります。SFC出身でこんなに素晴らしいチャレンジャーをしている人がいるんだと嬉しく思ったことを覚えています。なので、今日はとても楽しみにしていました。

小島希世子（以下、小島）…
ありがとうございます。少し自己紹介をさせていただきますと、私は環境情報学部を二〇〇二年に卒業しその後学士編入で文学部人間科学科を卒業し、現在は「えと菜園」と「農スクール」を運営し農業に携わっています。えと菜園では、無農薬・無化学肥料での野菜の栽培や通販、消費者の方へ向けての貸農園や農業体験を、農スクールでは、働きたいけど仕事がないホームレスや生活保護受給者の方や引きこもりの方と人手不足の農業界を繋ぐ取り組みをしています。

私は熊本県の農村地帯出身で、幼い時からいつか農業をしたいと思っていました。小学校低学年の時に食料不足の国のドキュメンタリーを観たのがきっかけです。食べ物を作れば生きられるし、自分のまわりの人が餓死しそうな状況としても救うことができるかもしれない、そう

再構築し、自分たちにあつた形の生活を自分たちで作っていくことが大事だと思っています。

を研究テーマにしていた学生がいました。農業でもいろいろチャレンジをしている人には、以前はまったく別の仕事をしていたという人も多くですね。以前の仕事で知り合った異業種の人たちとのコネクションやそこで培った考え方が今の農業に生きていると、学生のインタビューに答えてくださっていました。

私はコミュニティという切り口で健康の問題を考えています。人々が高齢になると、介護や医療という制度的なサービスはもとより、インフォーマルなケアや助けを必要とすることも多くあります。非制度的な支え合いの仕組みを持続可能にするためには、住民一人ひとりが「コミュニティ」という感情をもてることが鍵になると思うんです。例えば、自分が困っている時は誰かに頼ることができると感じられる一方で、自分も誰かが困っていたら助けてあげたいと思うような「お互い様」という感情です。パブリックな資源を無駄遣いしないためにも「我々の大事な資源」という気持ちを住民が共有できることも重要だと思います。

経済学で「コモンスの悲劇」という言葉があります。これは共有地をみんながそれぞれ食い尽くし、資源が枯渇し荒れ野になってしまう話です。超高齢社会を迎え、人材や財源などの資源が既に不足しつつある今、コミュニティの機能を再発見・

小島…おっしゃる通りだと思います。そのなかでも対等な人間関係がとても大事だと思います。私は人手不足の農業界と働きづらさを抱えた人を繋げるという取り組みをしています。しかし、いわゆる弱者救済という気持ちでやっているわけではないんです。仮にデスクワークや人と接する仕事では働きづらさを感じていたとしても、農業という身体を動かし自然に接する仕事であればその人にとっては働きづらさを感じにくいかもしれないし、個性を生かして生き生きと働き、農業界に貢献してくれるかもしれません。選択の結果として農業界で活躍しているわけですから、要は「お互い様」だし、持ちつ持たれつの対等な関係です。パズルのピースがうまくはまるように、お互いのニーズを満たしています。だから、一方的に助ける人と助けられる人という固定化された関係性はないんです。

また、農業を通じて共生について考える機会があります。例えば、私たちに個性があるように、トマトにも個性があるんですね。トマトの株も世話をすると一つひとつに異なった個性が表れるんです。実際に世話をして体感しているからか、農

思ったんですね。大学進学も農学部を目指していたのですが、浪人中、予備校の先生にSFCを紹介されて進路を変更したんです。今思うと、いろいろな人がいて個性を尊重し合うSFCの環境にいた経験が「えと菜園」や「農スクール」を作る上で生きたと思います。

秋山…そうだったんですね。私の研究会にも、これからの農業の可能性

業界の人は個々の違いや個性を受け入れる力が強いと思いますね。また雑草の中には、畑にとって良い働きをしてくれる草もあります。一概に雑草は悪いものだから除去しなければならぬわけではないんですね。なので、なるべく植物の多くが共生できるように工夫しています。土の状態や環境によって草の分布が変わったり、役割が変わったりするのを見ていてすごく人間的だと思うこ

秋山 美紀
（あきやま・みき）
環境情報学部教授
専門はコミュニティヘルス

小島 希世子
（おじま・きよこ）
2002年環境情報学部卒業後、
文学部人間科学科卒業
株式会社えと菜園 代表取締役



ともあるんです。人も環境によって集まりやすい人がいたり、能力を生かせたりしますよね。

●畑と人間社会

秋山…他のメンバーとの組み合わせによって化学反応や創発が起きることがありますね。やはりその人にとって生きやすい環境と生きにくい環境はあるものでしょうね。

最近では生きにくさを感じながらも、がいている学生をSFCでも見かけます。世の中は「ダイバーシティ」と言いながらも、特に就活の場面などでは個性が強い人や出る杭は打たれるような傾向もまだまだ見受けられます。型にはまらなくてはいい、と感じている人も少なくないでしょう。その点に関して小島さんはどう思いますか。

小島…「こうでなくてはいけない」という型に縛られてしまうと生き辛さを感じるのではないかと思います。しかし、畑に出るとそういった縛りから解き放たれる瞬間が多いんですね。畑では人間以外の生き物と接することがほとんどです。すると人間社会の問題は人間社会だけのものだと感じます。蟻や、蝶、草にもそれぞれの世界がある。そういう人間以外の世界を垣間見ると「生きなきゃいけない」という縛りにと

らわれず、生き抜くことだけでいいんだなって気持ちになるんです。そうは言っても、人間社会ではとられざるを得ないところもあるんですけどね。

秋山…そうですね。大学生活でも、小さいことにとらわれてしまうことがよくあります。外国に旅行に行った時などに「ああ、自分はなんて小さいことでよくよくよしていたのだろう」と気付くことがありますよね。型に縛る例として、二十世紀型の学校教育や農業があげられるでしょう。指導要領に則つてみんなが同じレベルに到達できることを目指す学校教育。特級やA級といった規格に合わせて栽培される野菜。そんな風潮が二十一世紀に入ってからだんだんと変わってきている気がします。

小島…今は社会全体の傾向として、みんなが同じ形を目指すのではなく、それぞれが異なる形や特性をもつて存在できるように向かっていると感じます。また、畑でも度々海外で受けるようなカルチャーショックを受けるんです。自然の良い面も悪い面も、自然の優しいところも厳しいところも見て、その度に異なる価値観を目の当たりにして刺激を受けます。こうでなきゃいけない、こっちが上でこっちが下みたいな序列に基づく考え方や、上を目指せという

ていらつしやるのでしょね。

●一人ひとりがアクターになる

——今後私たち一人ひとりが地域で豊かに暮らしていくために何が必要なのでしょう。

秋山…「みんな違っていい」というより「みんなが違うからこそおもしろい」のだと私は思います。だから自分がやりたいことに挑戦して自分が進みたい方向に進めばいい。政府がやってくれないなどと文句を言うのではなく、自分たちが行動を起こす一人になって、社会を変えていけばより良くなっていくと思います。自らがそのような挑戦できる環境をつくつていけるといいのではないのでしょうか。

小島…日本には一億二千万人の人がいますが、それは「一人」が一億二千万集まっているということなんですよね。だから、一人ひとりが主役であれば社会はもっと良い方向に向かっていくと思う。制度を作りそれで社会の方向性が決まることもあり、その制度も社会のニーズに沿ってどんどんブラッシュアップされていく。制度やシステムが整っていくことも重要ではありますが、それに左右されず自分の人生をまっとうしていくことこそ大切だと思います。



価値観、何かが足りないと、足りない人に与えなきゃいけないという考え方は、だんだんと変わっていくのではないのでしょうか。これからはそのような時代ではないと思います。

●一枚の葉から二枚の葉を育む「福祉」

秋山…先ほど小島さんが「弱者救済ではなく『対等な人間関係』が大事」とおっしゃっていたのを聞いて「福祉」の意味について考えていました。日本で福祉という言葉は、上から弱者に与えてあげるというニュアンスを含みがちで、与えられる人は何

——お話の中でコミュニティという言葉が出てきましたが、コミュニティが繋がることでどのような効果があるのでしょうか。また、現状ではさまざまなコミュニティが孤立しているように感じています。孤立しないためにはどうすればいいのでしょうか。

秋山…多様なコミュニティ同士が有機的に繋がっていくとおもしろいと思いますね。人と人が出会うことで化学反応が起きると同様にコミュニティ同士が繋がることで化学反応が起こると思います。今までなし得なかったことができるのではないかなという期待があります。

小島…相手のコミュニティが敵だと思うのは自分の人生を自分の手元に取り戻していかないからそのように思ってしまうのでしょうか。自分の意見を正しいと思いたいがために相手を否定してしまうことがあります。自分の人生を取り戻していくと、相手に流されないと同時に相手を尊重することができるとですね。特にこれから生きていく十代二十代の若者には自分の人生を自分の手元に取り戻してほしいですね。

秋山…組織とコミュニティという二つの言葉には違いがありますよね。例えば会社組織は目標や目的のもと

か足りない人とか、恵まれてない人という風に捉えられています。しかし、本来の意味は「ウェルビーイング」という、まったく異なる含意なんです。作家、ジョナサン・スウィフトにも「一葉の草しか育たなかつたところに二葉の草を育てるものこそ、人類の福祉に貢献する者である」という言葉があるんですよ。これ、まさに例えば農業なんですよ。一枚しか葉が育たないところに、土を耕したり環境を変えてあげたりすることで植物が自ら育っていく力を引き出して、もつと葉が茂られるようにする。そういうことが福祉の本質だと捉えることができると思います。福祉という言葉は誤解されるので私もあまり使わないようにしていますが、本来の福祉は、対等な関係性に基づいたものなんだと思います。

そうした意味では、小島さんが実践されていることは究極の福祉で、いろいろな人が伸びていくのをちよつと支えたり後押ししたりするプラットフォームなのではないかと思いました。

小島…私たちの農園では、引きこもっていた方も、ホームレスだった方も、生活保護の方も、心の病気の方も、障がいをもつた方も、刑務所や少年院から出てきて保護観察中の方も、一緒に農作業をします。「農園」に機能を果たす人が組織化されています。採用する際にも価値観の共有を求めたり、大卒以上などと求める能力の基準を決めている。

しかし、コミュニティは会社組織とは異なり「これを達成しよう」という確固たる目的をもつて繋がっているのではないんです。違っている人たちが「みんなが好きなことや、したいことをやって、それぞれが自己実現をできたらしでいいよね。でも困った時は、お互い助け合おう」というようなゆるい繋がりがコミュニティにはある。とは言っても、コミュニティというからには、何かを共有しているとか、コミュニティの内と外という境界はあるんですよ。私たちは所属組織や地域コミュニティだけでなく、いろいろなコミュニティに帰属意識をもつことで助けられることもあると思うんです。「我々」と思える仲間や「この人」という居心地がいいなあ」と他者に受け入れられていると思えるような、ゆるく繋がることができるところをいくつかもてるといいですよ。

(構成・平澤茉衣)

Diversityと防災

太田 喜久子 × 大木 聖子

●防災×ヘルスケア

大木聖子（以下、大木）…

よろしく願います。実は、災害医療と防災の研究を始めようと考えていて、去年から準備していたところなんです。ですので、この対談の機会をとてもありがたく思っています。学生の中にも災害医療と防災をテーマにして大学院に進学したいという人もいますが、問題の核心に手が届かないのが現状です。太田先生が災害看護の学会に携わっていらつしやるということで、お話を伺えるのを楽しみにしています。

太田喜久子（以下、太田）…

こちらこそよろしく願います。大木先生は防災について研究されているとお聞きしています。看護医療学部では、宮川祥子先生（看護医療学部准教授）も災害について活動されていますよね。

大木…そうですね。私が前職の東京大学地震研究所にいた時に村井純環境情報学部長が「IT×防災」のプロジェクトをインドで始められ、私は東大側のメンバーとして参加していました。その関係で宮川先生とも一緒にしました。

私たちはITが発達しているインドで、防災情報の提供に取り組んでいました。インドは人口が多く、一度の地震で多くの方が犠牲になります。

●防災で命を救う

太田…人は対象外なんですか？

大木…はい。なので、地震でたくさんの方が亡くなっているけど、私の専門としては地震計を設置するだけでした。でもだんだんそれに耐えられなくなってきたので、それから研究テーマを「防災」に変えました。地震研究所に所属していた当時は、地面の上を扱っているというだけのことです、防災を学問として見てもらえませんでしたね。数年後に三月十一日の震災が起きて、防災の需要が高まり、研究所内の雰囲気も少し変わった気がしています。

学際的な学びが行われているSF Cに来てからは私の活動範囲もすごく広がりました。それまでは小学校の高学年や市民を対象に防災を教えていたのですが、対象の範囲が拡大したことで幼児教育の防災活動にも取り組めるようになったんです。今は災害分野と医療分野が連携できたと思っています。

太田…そうですね。災害分野と医療分野の連携は必要です。我々医療分野側の人間も、積極的に大木先生のような防災が専門の方と連携していかなければならないですね。

大木…また、中学生を対象にした防災の講義では避難所の設営も被災者

が自分たちでやらなければならないことも教えています。「自分の命は自分で守る」ということを小学生のうちに覚えて、次は自分の周囲も見ているという中学校の学習指導要領にも合いますよね。そうすると、衛生面の指導など、看護の要素も入ってきます。先生が来て授業をするだけではなく、生徒自身が救急・救命ができるようになると思います。

太田…中学校での防災の授業は全国的にちゃんと行われているんですか？

大木…来年度、学習指導要領の大改訂があるのですが、そこでは学習内容が大幅に変わることが予想されます。新たな学習指導要領では防災の要素はかなり色濃く入っているのですが、それを教える先生側がよく分かっている点が多いので、教育者をサポートするための教材が必要です。例えば、震度は体感である程度分かれると思うのですが、防災の観点では震度だけでなく、地震の揺れが何秒続いたかが重要なんです。そのような地震の豆知識を私たち専門家が提供し、教育現場においても活用していただけると良いかなと思います。

太田…中学校での防災の授業のサポートも、そのような情報が広がる

す。その問題をITで何とか軽減できないかと思った次第です。その後、日本で東日本大震災が起こり、インドプロジェクトのご縁もあってSF Cに着任いたしました。それまで私は地震学の中でも、ずっと地球内部の構造の研究をしていました。なので、地面の上にいる人間は研究対象外だったんですよ。

だけでも随分と違いますよね。

大木…はい。そこで、防災にITを活用しようという試みがあります。今ITで天気を伝えることができる時代ですから、そのシステムを地震の震度報告に応用できたらと思っています。日本では震度を測定する地震計を各所至るところに配置しています。日本以外の地震国の多くは、地震計をそれほど多くの場所



太田 喜久子
(おおた・きくこ)
看護医療学部教授
専門は老年介護



大木 聖子
(おおき・さとこ)
環境情報学部准教授
専門は防災



に配置していないので、現地の人からアンケートをとって震度を調査しているんです。日本でも市町村合併が進むと今後地震計の数がどんどん減っていくことが予想されます。同じ市でも、市街地の震度と郊外の震度に大きな違いがあるかもしれないのに、それがわからなくなってしまう。

なので、今後はITを活用することで、各地域の震度を細かく把握し、さらにはその情報をビッグデータとして活用できると思います。日本こそ地震防災に関しては世界をリードすべきで、特にそれはSFCでできることだと感じています。

●ヘルスケアと大規模災害

大木…地震以外にも、テロや多くの人がけがをする状況はいつ起こるかわかりませんよね。看護の領域ではどのように対策をされているのですか。

太田…看護の領域には、大規模災害の支援があります。起こってしまった大規模災害に対する支援の仕組みは、職能集団である日本看護協会を中心に作られています。そこでは、災害支援の看護師を育成しているんです。災害が起きると、全国組織の看護協会の支部組織である都道府県の看護協会が看護師を被災地に派遣するという仕組みがあるんです。

しかし、そこに問題があるんです。例えば、二〇一六年の四月に熊本で大きな地震が起きたんですが、どれくらいの支援を要するかを想定するのは容易ではないという問題が挙がりました。災害支援にもさまざまなレベルがあつて、県内の支援のみで収束できるものや近隣の都道府県から支援を要するもの、また、全国から支援を要するものがあります。看護協会はその被害の程度やレベルに応じて援助を手配する仕組みをもっています。熊本の地震発生当初は熊本県内だけで対処できると考えていました。

しかし、実際は現場の人たちにとって現状把握がとても難しく、どのくらいの支援を必要とするかの判断に時間を要したんですね。そのせいで初動が遅れてしまったという反省があります。

大木…確かに熊本地震の時は震度七の揺れが二度起きたので、判断が難しかったと思います。被害の程度は一度目の地震直後の予測よりもっと大きいものでした。

太田…それと、看護としての災害支援を行っている組織は学会です。日本災害看護学会の創設は阪神・淡路大震災が発端で、それまで災害看護という専門領域は日本にありませんでした。そこから教育的な関わりを作ったり訓練を受けたエキス

パートが現地向かって情報を伝えたりするようになっています。また、日本だけではなく、世界の災害看護の学会を作るという組織づくりにも取り組んでいます。ただし、この学会にも横の繋がりが薄いという問題があります。糖尿病に関する学会でも高齢者を対象とする老年看護の学会でも、それぞれの領域を専門にする学会員は被災地に赴き、災害に関して専門性を生かし学会間で連携していこうという段階にあります。また、日本学術会議では建築や土木の専門家が中心になりながら防災学術連携体としてさまざまな分野が連携できるように動きはじめています。

しかし、横の繋がりを広げていくのはまだまだこれからですね。

●防災教育の変化

— SFCで災害が起きたら一体どうなるのでしょうか。

太田…SFCって、地震が起きてしまったら地理的に孤立してしまいそうですね。

大木…そうですね。私はSFCの防災対策ワーキンググループのメンバーなのですが、臨機応変に対応できることを前提にマニュアルを作っています。総合政策学部・環境情報学部では新入生向けに新しく防災ガイダンスを作りました。そして今年初めての試みとして、防災に関する

ガイダンスの語り口を物語風にしていますよ。そうすると、学生たちは関心をもつて聞いてくれました。物語調にしたのも、京都大学の矢守克也先生が提唱している「防災ナラティブ」が必要であると思ったからなんです。防災マニュアルでできることには限界があります。一方で、マニュアルで網羅しきれないことが地域固有のナラティブに含まれているんです。ナラティブは看護学の言葉でもありますよね。防災マニュアルから防災ナラティブへの移行を進めるべきだと考えています。

太田…確かに地域の固有性を生かした防災のあり方は必要ですね。そうですね。ナラティブの研究は看護でさかんにやっています。防災ナラティブの活動にはどのようなものがあるんですか。

大木…例えば、高知県の土佐清水市では中学生たちに「防災小説」を書いてもらっています。地震発生の日時とその日の天気を先生が決めて、生徒たちは主人公の自分がどう地震を生き延びたかを書くんです。ルールは「物語は希望をもって終えること」。この地域は、南海トラフ地震が起きた際に三十五メートルもの津波が想定されています。小学生の時から防災教育を受けているため、生徒達は何分後に津波が来るかという情報が頭に入っています。読むと感

動します。こういうのがまさにナラティブの力だと思えますよね。

実はこの活動が行われるようになったきっかけは、土佐清水市からいただいた「津波の想定を聞いて市民が防災訓練に参加しなくなりまし」という意見でした。つまり内閣府が三十五メートルという想定をいきなり出したことで「どこかの偉い学者が次の地震で自分たちが死ぬと言った」というストーリーが出来上がってしまった、地域住民の防災への意欲を喪失させてしまったんです。だからこそ語られなかったストーリーを語らせようと思い、このような活動を行っています。

●専門家同士のインクルージョンにむけて

— 防災に関して専門家同士は連携しているのでしょうか。

太田…これは看護に限ったことではないのですが、看護師は医療分野における専門家集団として頑張ろうという使命感が強いんです。そのため、看護師は援助しようとする意識がとて高いあまり「支援者」としての目線で見ることができない傾向にあるんですね。だから、現地の同じ看護職の方や医師、また行政との繋がりの中で目の前の方のニーズにどう応えるかが重要なんだと思います。さらに私たち医療分野の専門家も、発災した後にシステムの見直しをしたり政策提言を行おうと一所懸命考えていたりするのですが、まだまだ十分に行えていないのが現状です。

大木…そうですね。今の問題は専門家間のダイバーシティのなさなんです。例えば地震学会で「二」に関する反省会のような機会があつた時「専門家は他の専門家をアシストしないで自分でゴールしようとする」という意見が挙がりました。建築学をアシストしよう、土木工学をアシストしようという発想がなく、自分でゴールしようとすることに専念してどこにもパスをしないんです。この反省会をきっかけに、専

門家は他の分野との連携や今以上に社会のニーズに目を向ける必要性があることをより強く認識するようになりました。

太田…それぞれのもっている力を引き出すというインクルージョンの本質を極めることは、今までの看護の課題であり、何とかしなくてはならないと考えています。患者を思うあまり、相手に寄り添うことや安全・安心を最大限に提供しようということばかりを考えると、現場も疲弊していつてしまう。だからこそインクルージョンという視点に立ち、それぞれの年代や立場のもっている力を一緒に巻き込みながら現状をより良いものにする発想は必要なんです。

大木…使命感がある分、疲弊してしまいがちですね。南三陸町の中学校で、震災の翌々年に始まった防災訓練があります。ただこの防災訓練は普通の防災訓練とは異なり、生徒達は「自分の年齢に三十歳を足す」というルールのもとで行動するんです。生徒たちは四十二〜四十五歳の働き盛りの年代となります。また、このルールは先生にも適用されますから、防災担当の先生が八十五歳で体育館に座っているだけだったり、他の先生もブラカドを下げて日本語がわからない外国人役になったりするんです。こうした設定の中で避難してきた人々の役を演じる先生方

が次々と問題を起こしていきます。そうすると、生徒たちは学習してその問題に上手に対応していくんです。新しい立場に立った時、どのように行動すべきか、前回このような問題があつたから次はこうしよう、という発想が生徒たちに生まれま

す。この防災訓練は、被災した先生方が当時失敗した経験を学んでもらおうとして考え出したんです。私の研究会の学生はこれを机上でできる訓練に置き直して、それを全国に配布しています。ここに看護の学生が加わったら、看護の観点から伝えられることがあつたり、看護師になろうという児童や生徒も出てくると思うんです。こうした活動をしやすくするために、慶應の中でも学部を超えた災害医療のコンソーシアムを立ち上げるのはいいかもれませんね。

太田…全国でも災害のリーダー育成をしようというところはいくつありますか。慶應もそのような災害におけるリーダーの役割を担えたらと思います。

(構成・藤井咲妃)

Diversityとまちづくり

飯盛 義徳

×
小池 智子

●住民中心の地域包括ケアシステムのために
——先生方のご専門について教えてください。

小池智子（以下、小池）…

私の専門領域は看護管理、看護政策です。特に、チーム医療の機能を高める教育プログラム開発に取り組んでいます。このほかに、地域包括ケアシステム、トランジショナルケア、訪問看護の基盤の整備や医療安全の推進などについて研究しています。

飯盛義徳（以下、飯盛）…

私の専門は経営学で、地域活性化について経営学の視点で取り組んでいます。地域活性化に繋がる問題発見・解決のための方策を探るプロジェクトを地域の方々と立ち上げています。特に、効果的なプラットフォームの設計・構築が専門です。プラットフォームとはいろいろな人たちが参画をして、相互作用を誘発し、そこから社会的創発（予期もしないような何か良いこと）が起るようなコミュニケーション基盤や仕組み、空間のことです。

——現在の日本の地域連携の状況について、どのように捉えていらっしゃいますか？

小池…厚生労働省が推進している地域包括ケアシステムは、住み慣れた地域で自分らしい生活を最期まで送れるように、医療と介護の連携に加えて暮らし方、生活の支援、介護予防などを地域でサポートし合い統合

究です。違いは小池先生の軸がヘルスケアで、私の軸が産業振興や居場所づくりだということです。

やはり小池先生がおっしゃるように、地域ごとで状況は全然違いますね。だから、地域に合わせた繋がり方を考えることが重要になってきます。さらに、最初は誰かに指示されてやるかもしれませんが、次第にいろいろな人たちが自分たちでいろいろなことをしていくようになれば、地域は元気になっていくと思います。

●「紐帯」をまちづくりに生かす

——地域にはさまざまな人々が暮らしていますが、その多様な地域住民がうまく繋がって、まちづくりを進めていくためにはどのような働きかけが必要でしょうか。

飯盛…社会学に「強い紐帯」と「弱い紐帯」という概念があります。強い紐帯はコミュニケーション頻度が高く、お互いの価値観や生活環境も似通っているような人々の間の繋がりをいいます。そこでの情報は同質的です。一方、弱い紐帯はコミュニケーション頻度が高くなく、そこでの情報は異質なものを含みます。こ



小池 智子
(こいけ・ともこ)
看護医療学部准教授
専門は看護管理・看護政策



飯盛 義徳
(いさがい・よしのり)
総合政策学部教授
専門はプラットフォームデザイン、
地域イノベーション、ファミリー
ビジネスマネジメントなど

ります。だから私たちは強い紐帯と弱い紐帯が上手に共存している段階を「効果的なプラットフォームの第一歩」と言っています。

縁側はそれを実現している良い例ではないでしょうか？ 縁側は、家の中から外から入らないですよ。近所の人が気楽に寄ってきて新しいコミュニケーションが自然と生まれる場所、それが縁側です。つまり、外と内を繋ぐ役割を果たしているんですよ。私は現在、縁側のように効果的な境界の設計を研究しています。

小池…なるほど、とてもおもしろいですね。

飯盛…境界を上手く活用している例があります。北海道の岩見沢駅です。この駅では子どものプラレール大会やコンサート、結婚式が行われているんですね。実はこの駅を設計したのは私の出身高校の後輩である建築家の西村浩さんです。「設計の際に何に気を付けたんですか？」と聞いたら「境界に気を付けました」と答えていました。建物の中で何をしているのが外から分かるし、内から

も外の様子が見えるので、駅の近くであればどこにいても同じ空間をある程度共有していると感じられるように設計したそうです。この縁側のような空間があると、人々が気兼ねなく自由に行き来できるので、自然にその場の人々に多様性が生まれると思うんですね。

多様性のある見方というのは非常に大切なことです。学生たちは地域に行くとき、役所の人が用意してくれたパンフレットの名所などにはあまり興味を示さない一方、そこで出会ったおばあちゃんの郷土料理が美味しくて感動することがあります。よそ者だからこそ、その地域の良さを発見できることもあるはずですよ。住民が一見何もないと感じているところから積極的に資源を見つけていることを「資源化」と呼びますが、この資源化のアプローチを可能にするのは外部からの視点なのです。地域にとって資源になるものを多様な人々と作りあげていくプロセスが非常に重要なんですよ。

小池…その資源化のアプローチとても似た経験をしました。実は発展途上国にはいろいろな素晴らしい仕

組みがあります。医療系三学部が学生たちと、ラオス南部のガンドン村に毎年行つてフィールドワークを行つています。発展途上国に赴くときどうしても足りない点や問題点ばかりに目が行きがちですが、どの地域でもこちらが学べべき強みや素晴らしい資源があることに驚かされます。その村の住民は経済的には貧しく、わずかなお米と森で採ってきたものを市場で売つて生計を立てています。一方で、コミュニティは非常に豊かなんですよ。必要なものは住民同士の物々交換で足り、病気になるばみんなが助け合い、家もみんなで協力して建てています。このような人と人の繋がりと支え合いは、とても価値のある地域の財産ですよ。このような発展途上国の少ない資源で豊かな生活を可能にする仕組みは、私たちが地域包括ケアシステムなどのさまざまな課題に取り組む上での重要なヒントとなっています。

医療従事者が少ないため、村人たちは専門家に頼らず自分たちの工夫や共同体の助け合いで解決を試みています。そこに人々と地域の強靱な力を感じます。日本は病院も医師も

看護師も多いので、地域住民はいつでも頼ることができる一方、身近に情報やサポートがあれば解決できることでも専門家に頼つてしまいがちです。その人が本来持っているセルフケアの力と地域のサポートシステムを強化する方が、うまくいくのではないのでしょうか。

飯盛…私のフィールドワークで感じたこととまったく同じでびっくりしました。私たちはよく条件不利地域に行きますが、そこからたくさんの方付きを得られています。しかも都会の真ん中ではできないような、コミュニティの結び付きがまだまだしっかりとあるんですよ。

私たちの実践テーマは、参加者全員が主体的に居場所をつくることのできる仕組みづくりです。例えば、地域でのプロジェクトで人々が資源を持ち寄ってくるポットラックパーティーのようなことをしています。この試みによって利用できる資源の数や種類が増えるだけでなく、参加した人たちに主体性が芽生えるのです。やはり、主人公は地域の人たちなんですよ。先ほどお話しした岩見沢駅にもみんながコミットできる

仕組みがあつて、レングの一つひとつに寄付した人の名前が彫つてあります。居場所がいつのまにか設けられているのではなく、参加者全員が主体的に居場所をつくるのです。先ほど小池先生が挙げられた地域包括ケアシステムでも「さあみなさん集まってください」と言うだけでは人を集めるのは難しいので、いろいろなインセンティブ（動機付け）をもたせて参加者を募るのが大切だと思いますね。

●専門家が仕掛けるまちづくり

小池…そうですね。今回のキーワードであるダイバーシティとインクルージョンは、高齢者や障がいをもつ方、外国人の方などさまざまな人々から構成される地域で、地域包括ケアシステムを作りあげていく上でとても重要なことだと思つています。

地域住民主体のまちづくりには、専門家として仕掛けをつくることも大切です。私は訪問看護に携わっている人たちと、地域で暮らす高齢者が孤立しないための方策を考えてきました。スーパーの買い物届けサー

ビスは便利な一方で、高齢者が外に出る必要がなくなるため、社会的に孤立を助長しかねないのです。一日中家の中にいると身体能力も落ちてきて、寝たきり状態になるリスクが高いです。このため、高齢者の孤立は介護予防の観点からも非常に大きな問題です。そこで始めたのが、うどん打ち大会です。訪問看護師が地域の高齢者に介護予防やヘルスチェックのイベントに来てくださいます。呼びかけても誰も来ないわけですよ。ところが、うどんを打つてみませんか、みんなで美味しくいただきますませんか、ついでにヘルスチェックもしましょうと呼びかけると参加者がどつと増えます。うどん打ちとヘルスチェックを組み合わせ、介護予防と健康チェックの目的が達成できるように仕掛けをつくつたわけです。ここでは、高齢者と医療従事者が繋がるだけでなくコミュニティの住民同士の繋がりができ、高齢者の孤立予防にも役立っています。

実はこのような取り組みは、地域包括ケアシステムを進める上で重要なアプローチだと思つています。ヘルスケアや予防が特別なことではなく、日常的な生活やコミュニティの

活動に包含され、気が付かないうちに自然に行つていくというような仕掛けを随所につくつていくといいのではないのでしょうか。先ほど飯盛先生がおっしゃったコミュニティベースのまちづくりとのコラボレーションはとても興味深いと思つています（笑）。

飯盛…本当に一緒にできたらおもしろそうですね（笑）。よく思うのですが、地域づくりも結局根本は人々の健康がベースにないといけないんですよ。

小池…本当にそう思います。WHOは「健康」を人が病気でなくとか弱っていないことではなく、肉体的にも精神的にもそして社会的にも、すべてが満たされた状態と定義しています。しかし、そのすべてが満たされている状態が「健康」だというのは、寿命が延び慢性疾患が中心の疾病構造である現代においては、必ずしもふさわしい定義とは言えなくなっているように思います。今は慢性疾患と診断されてもどんなに障がいがあったとしても、適切な療養を続けそれとうまく付き合つて適応してい



（構成…佐藤彩華）

飯盛…それが実現できた社会こそまさに多様性の世界だと言えるでしょうね。

くことができれば、寿命をまっとうしその人らしく生活することが可能となりつつあります。私たちは病気や障がいなどの制約があつたとしても、社会のサポートシステムやテクノロジーを活用することによって、人と繋がつて社会に貢献することができる存在なのだ、という認識が世界に広まつてきているんじゃないでしょうか。このような概念の共有が、インクルーシブな社会を作りあげる基盤となっています。



SFCで撮影したベストショットを
お待ちしております。
投稿先はこちら
Twitter: @KEIOSFCREVIEW
mail: keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

- 5 木村 英雅 (環境情報3年) 「sfcut」
- 6 河崎 友里 (環境情報2年) 「見える、明日」
彼女の見つめる先は、明日。未来である。SFC生
なら夢をもって、上を向いて歩こう。
- 7 石塚 佳音 (看護医療2年) 「手話の○(輪)」
I'm手話さんのサークル活動風景。人と人を繋ぐ
手話が楽しそうな○を作りました。
- 8 鈴木 峻平 (総合政策2年) 「夢ここで」
SFCは、一人ひとりの様々な夢をのせている。
ここで学び、ここから始まる。
- 9 川上 仁之 (環境情報1年) 「初夏の訪れ」
咲き乱れるシロツメクサが印象的な5月の中旬。

5		
7	6	
8	9	

新連載



私にうつるSFC

普段見慣れたあの場所で新しい発見をする。
どこで写真が撮られたかを考えるのも楽しいかもしれない。



- 1 木村 英雅 (環境情報3年) 「metamorphosis」
- 2 武田 海 (環境情報1年) 「寂寞」
このスロープ意外と長くて階段の方が楽だけど、
なんか雰囲気好きだからつい使ってしまう。
- 3 河崎 友里 (環境情報2年) 「好奇心」
この先には一体何があるのだろう。光の境界線に
手を伸ばそうとする、好奇心。一歩踏み出す勇気
を描いている。
- 4 武田 海 (環境情報1年) 「花飾り」
実際に花飾りを見たことなかったですが、意外と
ぱっぱと作っていたので驚きました。バシャリと1
枚だけ撮った写真。

1	2
4	3



写真協力 SNAPs

私の推薦図書

國枝 孝弘



本との出会い。みなさんはどのよう
に本と出会っていますか。自分の
これまでの人生を振り返ると、本と
の出会いには、たびたび人との出会
いが重なっていることに気づきま
す。この連載は「本を推薦する」と
いうことですが、今回は、ぼくが出
会った人びとがぼくに推薦してくれ
た本を、今度はみなさんに推薦しよ
うと思います。ゆるやかな人と人の
つながりが本との出会いで生まれる
ことを期待して。

中学生の時代から話しましょう。
ぼくが出会ったのは、ちよつと風変
わりな美術のK先生です。他の先生
とは違い、極端にやせていて、しか
も長髪。その先生の授業中にたまた
まちよつと抽象的な絵を描いたら、
先生が「この本読んでみないか」と
貸してくれたのが『シュルレアリス
ム』という本です。タイトルしか覚
えていなかったのですが、この原稿を書
くために検索してみたところ、ロ
ジャー・カーディナルという人が書
いた本で、一九七七年にパルコ出版
から出ていました。ぼくが読んだの
は出版されて二年後になります。こ

の本で、二〇世紀前半のヨーロッパ
における芸術運動であるシュルレア
リズムに興味をもち、続いて読んだ
本が坂崎乙郎『幻想芸術の世界』
シュルレアリスムを中心に』でした。
この本で講談社現代新書を知ること
になります。

次は高校です。ここでもまた長髪
の風変わりなF先生に出会います。
あるとき用事があつて職員室にF先
生を訪ねていくと、先生の机の上に
綺麗な装丁の本が置いてありまし
た。誰の本か尋ねると「瀧澤龍彦だ
よ。ぼくが一番好きな作家」。瀧澤
龍彦はフランス文学者で多くの翻訳
を手がけています。机の上にあつた
のは『玩物草紙』というエッセイ集。
「珍奇な物をもてあそぶこと」が好
きな瀧澤が、虫、カフスポタン、地
球儀、美術館、童話などをテーマに、
そこから浮かぶさまざまな連想を自
由に綴っています。現在は小学館の
P + D BOOKSで復刊されていま
す。

高校といえはもうひとり忘れられ
ない先生がいます。一年生の夏休み
前の古典の授業中でした。先生が次

のようなことを言いました。「みな
さんは、今年の夏休みは何をして過
ごしますか。私は『源氏物語』を全
巻読みたいと思っているんですよ。
『源氏物語』の日本語は本当に美し
い。それに比べて最近の小説はなん
ですか。『万永元年のフットボー
ル』？ タイトルからしてふざけて
ます」。それを聞いて「よし、じゃ
あぼくはその本を読んでやろう」と
思い、夏休みに読みました。それが
大江健三郎との出会いです。1ペー
ジ目から圧倒されました。その描写
はジャン・リユック・ゴダールの映
画『気狂いピエロ』のジャン・ポー
ル・ベルモンドのようです。何を言っ
てるかわからない？ ぜひ、本を読
むか映画を観てください！ 本は講
談社文芸文庫で入手可能です。

さて、大学での出会いは友人です。
大学に入学して最初に友だちになつ
たHくんです。彼は名古屋の出身で、
一年生の夏休み、ぼくたちは一緒に
各駅停車の東海道線を乗り継いで帰
省しました（ぼくの故郷は岐阜県で
す）。名古屋駅に着いて別れざわ、
彼に「夏休みはどうしているの？」

と聞くと「ブルーストの『失われた
時を求めて』を全巻読むつもりだよ。
とにかく長い小説だからね。」と言
われました。今でこそフランス語を
生業としていますが、実はこの有名
なフランスの文学者の名前を聞いた
のはこのときが初めてでした。確か
にとても長い小説で、夏休みのよう
にまとまった時間がないと読めませ
ん（時間があつても読み通すのは難
しい）。しかし日本では何種類もの
優れた翻訳が出ていて、しかも文庫
で手に入ります。ぼくのおすすめは
光文社古典新訳文庫の高遠弘美訳で
す。全十四巻の予定ですが、現在六
巻まで出ています。

そしてフランス語。大学四年の夏、
東京の御茶ノ水にあるアテネ・フラ
ンセという外国語学校でフランス語
の勉強を始めました。そこで出会っ
たのがS先生。すでに七〇に手の届
くお歳でしたが、授業はきわめて情
熱的でぼくはその姿に強い影響を受
けました。その先生のもとで助手と
して数年過ごすのですが、そのとき
に勧められたのがフランス語文法の
經典とも言える Maurice Grévisse、

Le bon usage という文法書です。
これは一二〇〇ページ以上ある分厚
い文法書ですが、とにかくひとつひ
とつの項目を舐めるように読みまし
た。

大学で勤めるようになってから
は、さすがにこちらから学生に本を
勧めることが多くなりましたが、それ
でも授業が終わったときに
「先生、〇〇は読んだことあります
か？」と本を紹介してくれる学生も
いました。中でも最も印象に残って
いるのはアメリカの小説家カート・
ヴォネガット『スローターハウス
5』（ハヤカワ文庫）です。さすが
に名前は知っていました。恥ずか
しいことにアメリカ文学に疎く、読
んだことはありませんでした。作品
の中で、ある人物が述べる「人生に
ついて知るべきことは、すべて
フォードルドストエフスキーの『カ
ラマーゾフの兄弟』の中にある、と
彼はいうのだった。そしてこうつけ
加えた『だけでもう、それだけじゃ
足りないんだ』。これはまさにヴォ
ネガット自身の作品にあてはまるこ
とです。時代はいつもその時代を語

る文学を待っているのです。

最近の本との出会い。いろいろな
本を紹介してくれるのは、いや紹介
どころか、本のプレゼントまでして
くれるのは、研究会の卒業生たちで
す。最近勧めてもらったのはブレ
イ・デイ・ミカコ『今モリッシーを聞く
ということ』（Pヴァイン）です。
モリッシーは、八〇年代のイギリス
のロックバンド The Smiths の
ヴォーカリストで、僕が高校から予
備校時代にかけて本当に夢中になつ
たミュージシャンです。どのくらい
好きだったかというと、受験のため
に東京に来たときに、試験が終わっ
てから渋谷のタワー・レコードで
買ったレコードが、このバンドの
「Hateful of Hollow」というアルバ
ムだった、というくらいです。この
本は、稀代のロックスターを通して、
彼の音楽活動を、同時代のイギリス
の社会情勢と照らし合わせながら紹
介していく、現実を鋭くえぐったレ
ポートです。そこで言われることの
ひとつは、これまでの社会対立は左
翼と右翼だったのに、今は上流階層
と下流階層になっているというもの



國枝 孝弘

（くにえだ・たかひろ）

総合政策学部教授

専門はフランス文学、フランス語教育

語帳から一日百個ずつ丸暗記すればいいよと教えてもらった(笑)。その単語の横に書いてある例文一文くらいが偏差値一に相当するよと。そして、単語数と受験までの日数を計算してみたら、受験当日までに二周くらいできるとわかって、もう完璧じゃないかと勘違いして。受験のためには英語と小論文の対策だけをやったら受験校は落ちたときに箔がつく大学を受けようと思って探したらちやうどSFCがあった。当時、卒業生がまだいなくて一番試験が難しいすごい学校だ！と言われていて、入試当日の英語もやっぱり難しかった。けれど、なぜかその時勘がさえまくっていて受かったんだよね。これで運を使い果たしたんじゃないかと思つて、合格発表から自宅に帰つてくるときは上から物が落ちてきたり、電車が脱線して死んじゃったりするのかとそわそわしてた(笑)。

合格はしたものの、実は行く気はそんなになくて。というのも、青山学院大学の二文(文学部第二部)も受かったので青学に通おうと思つていた。青学だと渋谷で四年間過ごせて、その上自宅からも近い。ところが、母親が生まれて初めての親孝行だと泣いて喜んでいたら、聞けばSFCはアメリカ式の学校で海も近くでよさそうな気がして。一生に一度くらい親孝行でもしようかと思つて安易に進学を決めたんだよね。

今は違うだろうけれど、その当時は小田急線の駅しかなかったし、湘南台近辺はまだいろいろなものが出来上がつていなかったから駅からバスに乗つて通つた。遠藤とか六地藏とか怪しい地名があるじゃない、そここの住宅街からどんだん辺鄙なところに行くにつれて、気持ちもずんずん落ちていった。正門のようなところでバスから降ろされて「おいおい話が違ふじゃないか！」という気持ちになったよ。

よく憶えているのは入学して間もない晴れた日に、構内にいる学生が「今日、午後は雨だね」と話してた光景。傍を通りかかって「なんで雨だつてわかるんだ？」と聞いたんだ。そしたら「今、豚の臭いがしますよね、風向きで豚の臭いがすると雨なんです。高座豚つて言つてこのあたりの名産なんですよ。」と教えてくれて。ああ、とんでもないところに来たなあ。

恩師との出会い

——SFCの講義で印象に残っていることを教えてください。

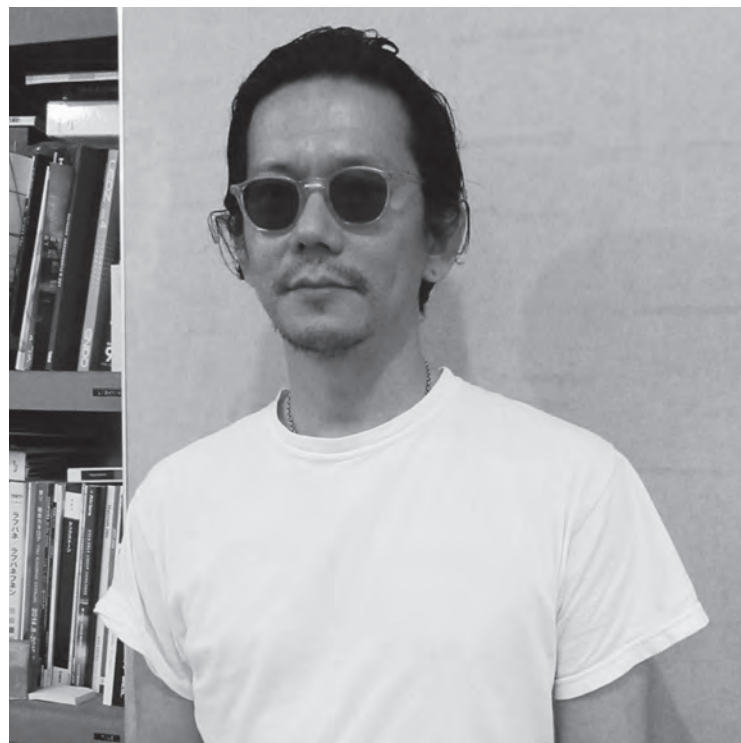
今も外国語つて厳しいのかな？ 当時はインテンシブで週四コマあったんだけどあれが曲者で、語学が原因で留年した学生も多かった。三回休んだら単位はこないと。何も申請をしなかつたら自動的に英語の中級クラスに入れられたんだけど、後から考えたそれですごくラッキーだったんだよね。ローレンス・デビッド先生がそのクラス担当で、アメリカのケント州立大学の出身だった。ケント州立大学で起こった学生運動で、ベトナム戦争反対のデモの最中に州兵が発砲して学生が殺されたという大きな事件があったのだけど、そのときにデビッド先生は在学中に街中ヒッピーだらけのなか、グレイトフル・デッド(一九七〇年代の



SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人がいる。このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。今号は、インタビュー雑誌『Sputnik』を手掛けたのち、国内外のさまざまな雑誌で編集、執筆に関わっている野村 訓市さんにお話を伺った。

野村 訓市 (のむら・くんいち)

1997年総合政策学部卒業
元 STUDIO VOICE クリエイティブディレクター。『BRUTUS』、『EYESCREAM』、『OCEANS』、『GRIND』で連載中。またブランディングやインテリアデザインをTripster 所属として手がける。現在はウェス・アンダーソン監督の次作制作に参加している。毎週日曜日 J-WAVE で antenna Travelling Without Moving を放送中。



SFC受験に至るまで

——どうしてSFCを志望されたのでしょうか？

幼稚園から高校までは学習院に通ったんだ。大学はそのまま進学が受験というのが家族の方針だったんだけど、どうしたわけか俺は毛並みが違つて育つてしまつておっぱいを食らった。高校卒業時の当時はバブルで、大学に進学しないのはありえないという風潮だったんだけど、その頃俺は気にもせず遊びほうけてた。一応浪人生という名目でぶらぶらしていたんだけど、年明け近くに友達が「いい加減どうすんの？」と聞いてきて、それからようやく初めて模試を受けたよ。そしたら、偏差値が五〇を切つていて志望校の判定が全てDだった。相当まずいと言われたね。やりたいことも特になかったんだけど、四年間の時間を買つてやろうと思つて、そこから受験勉強に取りかかった。完全に不純な動機です。偏差値も一日一上げれば、ひと月で七〇になるだろうつて勉強方法を聞いたら、英語だったら英単

生で、昔のいろいろなことを教えてくれたし、旅を通して学んだことやおもしろかったことについての話をひたすら黙って聞いてくれた。でも知らぬ間にSFCを辞めてアメリカに帰っちゃったんでちゃんとしたお別れができなかったんだけど、勝手に恩師だと思っている。

当時周りからは自分は変わり者だと思われていたんだけど、たくさん声をかけられた。「普段何してんの？」とか「なんでそういうことをするの？ 楽しいの？ じゃあ、連れてってよ」なんて感じてね。特に慶應義塾ニューヨーク学院出身の人たちから質問攻めにあつた。でもそう聞かれるとこちらもおもしろいもので、じゃあいいよ、つて連れて行つたよ。みんなでインドに旅したこともある。彼らはモノの見方がすごくフラットで、興味のあることであれば何のてらいもなく質問して、行動に移す。そういうのいいなあ素敵だなあと感心した。それはSFC生全体にも言えることだったけど。今のSFC生もそうであつてほしいな。自分がそこに属していないから話しか

けづらいとか躊躇してないで、興味があることに向かつていくのは他の学生とは違う特徴だったから。自分自身はすごく偏つた、きつと鼻につく学生だったと思うけど、そういうてらいのない接し方をさんざんされて棘がとれた気がする。

——在学中によく旅をしていたとのことですが、何かきつかけがあつたのですか？

もともと俺は都会のもやしつ子だった。へらへら遊んで過ごして、あるとき人付き合いの薄さにごか飽きてしまった。自己紹介をする時に「慶應のSFCのなになにです」つて言えば、インスタントに信用された経験はない？ そのことによつて、相手だけでなく本人もいい思いをするような。自分もそれまではことさら肩書きを利用していたと思うんだよね。けれど、だんだん誰が本当の友達かわからなくなつてきている疑問に思う、そういう時期があつた。

そんな薄つぺらい人付き合いに飽

きてきた頃に、旅にハマるきつかけがふと訪れた。知人に会うために国外へ旅に出ていたんだけど、道中、あつまんないやと一人になつているときに見知らぬ人と仲良くなつた。相手がお金持ちだからとか考えずに、純粹に気が合つたから友達になつたんだよ。「お前変わった日本人だなあ、おもしろいなあ」とかそういうノリだったよ。お酒を奢つてもらつて仲良くなることもあつた。そういうのが心地よかつたんだと思う。で、度が過ぎたんだろうね。

『編集』の魅力

——自分のメディアを持つことはSFC生のなかで関心が高いことだと思いますが、野村さんは現在ラジオのパーソナリティをされたり、ご自身で雑誌をつくつていたりもされていますよね。

俺は、自分のメディアを持つとうと意識していたわけではなかつたんだよ。むしろ、実は自分のやりたいことがわからなかつた。俺は器用貧乏な人間で、適当だけどなんでもなん

となくはできちゃう。でも、自分が何をやりたいかについてはさっぱりわからなかつた。

そんな時、少しでもおもしろそうだと思うことをリストにして実際に片っ端から実行してみても、それが嫌いだつたら二度とやらなければいいんだという話を聞いたんだよ。自分にはびつたりだと思つてこの方法を実践してみた。それで、最初に取り組んだのはインタビューと編集だった。終わつた時には一生やろうとは思わなかつたんだけど、もし次やるんだつたらもつとこうしようと考えてる自分に気付いた。自分の中にエネルギーが湧いてきた初めての体験だつたから、じゃあまたこれは続けてみようかと思つたのが編集業に携わるようになったきっかけ。

現在の仕事も結局、デザインにしてもいろいろな要素を編集する編集業だと思う。どんなことも編集してまとめるのは、本を作るのにすごく近い。例えばSFCらしさとKEIO SFC REVIEWらしさとは異なる要素があるかもしれない。でもそれらを合わせてまとめていく。全体的に

伝えたいことを表紙やタイトルで表

現して、コンテンツを構成していく。それができればいろいろなことができる。例えば映画でもアプリでも。いろいろな要素を集めて作りあげる作業はすべて編集業なんだよ。自分ができなかつたとしたら、できる人たちが集めて、一つの形にするのもやつぱり編集。自分ができないところは、できる人が担つて、それぞれのピースが一緒に噛み合ったときに一つの大きな絵が描ける。一緒にやつてくれる人を探すのも一つの編集作業なのだから。とっても魅力的な仕事なんだよ(笑)。

——野村さんはこれまで、アパレルメーカーのTHE NORTH FACEやBEAMSのブランディングに携わつておられますが、それも編集のうちなんですね。

そうだね。俺はブランドでも九〇年代からTHE NORTH FACEがすごく好きで、その頃は商品が少なかつたんだよ。自分がそのブランディングに関わりはじめて久しぶりにお店

に足を運んでみたんだ。そしたら、モノが多すぎて、よくわからなかつた。そういうふうに感じる人がたくさんいるんじゃないかと仮定して、じゃあブランドに求められるものは何だろうつて考えながら、それを実現するために必要な要素をミックスしていく作業も編集だよ。

小論文をきわめる

——編集は独学で習得されたのですか？

そうだね。編集のためだけの勉強はしていないけど、本は読んでいたね。小論文の勉強と一緒にだよ。みんな受験のために一度はその対策をしたんじゃない？ 小論文つて結局自分の伝えたいことを三行位で言えないとだめじゃない？ それを実際書くとき、満遍なくすべての言葉を生かそうとするとフラットになりすぎるから文章に抑揚をつけたり、伝えたいことを強調するために与太話をあえて残したりするなどの工夫が必要だけれど。

もし小論文の書き方がわからな

かつたら、とりあえずバラバラな内容の新聞記事を三つ用意して、その三つの記事の要点をまとめて、それについて自分が何を言いたいかを書く。十回くらいやれば、どうすれば自分の伝えたいことが伝わるか、それがわかるようになると思う。小論文と企画書の作り方はとても似ている。小論文なんて意味あるのかよ、と思つていたけれど、社会に出て最も意味のある、役立つことかもしれない。

休学のすすめ？

——SFC生にメッセージをお願いします。

伝えることを一つ挙げるなら、お金の使い方がな。今多くの若い子たちはよく貯金するつて聞く。銀行に貯金してる金つて将来には使えるんだろうけど、今の自分には何もかえつてこない死に金。そんなの三十歳くらいからでいいんじゃないの？ 時間もお金も自分に与えるべきだよ。経験を買いえ、というのもうつとらしい表現だけど、好きなことであ

ればいくらでもお金を費やしてもいいと思う。あとで生きてくるから。

旅行している時、海外の若者はいいなと思つたことがあるんだけど、それはオックスフォードでもどんな大学でも、学生の中には一年ほど休学する人も少なくないらしいこと。一年生の終わりから二年生までに専攻を決めるから大学入学後に休みを一年とつて、自分はやつぱり弁護士になりたいからその準備に取りかかりようとか、人生を見つめ直したり進路を調整したりする。SFCに入るのにもたくさん勉強して、入学してからも四年間勉強し続けてすぐ社会に出る。でも、君たちは果たしてどれだけ自分自身や社会のことを知っているんだろう。俺はまったく知らなかつた。タイミングは人それぞれだけれど、休学して自分や社会を知るために大学生の間に旅をするのもいいと思う。旅じゃなくても、自分の思い描いているイメージに近いところで働いてみて、まわりを知るのもいい。そこに自分を変えるチャンスもあるんじゃないかなと思う。

(構成…坂本美佳)

私は慶應の文学部の出身で、一九八〇年代前半に大学生時代を過ごしました。学生時代の活動は大きく分けて、文学部がその当時設置した人間科学専攻の一期生としての活動と多変量解析 (multivariate analysis) のクラブ活動です。この人間科学専攻は、いろいろな学問分野を超えた研究が必要だと盛り上がりつつあった当時の風潮に合わせて作られた専攻で、教育学、社会学、心理学、文化人類学、哲学が融合した学問領域です。そういう点でSFCに似ていましたね。

大学院時代はさまざまな領域の出身者が取り組んでいた消費者行動を研究テーマとしていました。その後SFCに着任したので、振り返ってみるとすべて学際的な学び舎で育ってきたことが分かりますね。最終的には良かったと思うのですが、途中は自分が根なし草であるかのような不安な気持ちもありました。

話を学部生の頃に戻しますね。人間科学専攻に入った当時の一九八〇

三田で過ごした学部生時代

——桑原先生の学生時代の話をお聞かせください。

年代初めは、日本でPCが人々の手に届くようになりはじめた時代です。例えば、NECのPC8000というコンピュータが発売されましたが、メモリーはなんとたったの三十二キロバイトしかありませんでした。それまでは、やり直しがきかない上に精度の低い手まわし計算機で解析をしていたと聞かされていましたが、コンピュータの普及によって研究者でも学生でも気軽に多変量解析が使えるようになってきた時期でした。大学では、文学部の心理学専攻の学生を中心に、みなで多変量解析の勉強をしようという機運が高まり、クラブが発足しました。

クラブの活動内容は多変量解析の勉強をしてはそれをプログラムで組んで分析をしてみるといったものでした。のちに私がゼミで指導していただくことになる小林ポオル先生(元文学部准教授)が顧問の先生でした。解析しようすると大学に実験室が必要なのですが、三田には空き教室がなかったため地下三階の倉庫を片付けて研究室を作り、そこで活動していました。その部屋には窓がなく空気が通わないので、機械で強制換気をするといった、お世辞にも良い環境ではなかったんですよ

ね。でも、学生が集う居場所ができた。SFCにはメディアなど学生の皆さんが集う場所は当たり前のようにあるんですが、三田って学食や学外の喫茶店で集うしかなかった。環境は良くなかったものの、活動できる場所があるのはありがたかったんですね。時間があればその地下研究室に行き、コンピュータでプログラムを作る。そこから授業に行ってまた研究室に戻ってくる。そんな学生時代を送っていましたね。

当時三田は午後九時になると学生は追い出されていたので、その後はみんなで飲みに行ったりしました。正門を出てほど近くに玉栄(正称: 玉栄菜館)という昔からやっている中華料理屋があって、五人ぐらいのグループで毎晩のようにそこで担々麵を食べていたんです。小林ゼミスペシャルという特別裏メニューがありました。これは、いわゆる激辛担々麵。みんながやせ我慢して、どんどん辛くなつてしまった。ある時汚れた十円玉の上にその担々麵の汁を垂らしてみたら、とっても綺麗になったんですよ。こんなの食べていたんじゃない身体にやばいよって言つて(笑)。

ある時、玉栄のおじさんが俺に「あ

なたはそのうち絶対先生になるからもう今から先生って呼ぶね」って言ってくれたんだよ。一番最初に先生と呼んでくれたのは玉栄のおじさんだった。

——具体的にどのようなデータを多変量解析で検証していたのですか。

人間科学専攻の先生が社会調査に随分携わっておられたので、学部時代はその分析の手伝いをしました。実際に自分のデータの解析を始めたのは大学院時代からです。

学部生の頃は、大学院に進むか就職するかを考えていました。学んだ手法がまだ世の中に広まっていなかったんで、これを使って社会で何かをしたいと思ったんです。同時に、マーケティングや消費者行動をテーマにして研究もしたいと思ったので大学院進学を決めました。当時、消費者行動研究の大家であった井関利明先生(総合政策学部名誉教授)に指導していただきました。

修士課程の活動も二つの大きな柱がありました。まず、官能検査について勉強を始めました。日本科学技術連盟(以下、日科技連)主催の官能検査研究会に参加しました。こ

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。

しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、

それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

今回は、総合政策学部で教鞭を執っている桑原武夫教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



文学部人間科学専攻一期生・授業合宿

(1982年夏、於八王子セミナーハウス 写真右上)

桑原 武夫

の研究会の活動内容は企業の人々を対象とした定期的な勉強会をコーディネートとして催したり、例年大きなシンポジウムを開催したりすることでした。私は学生でしたが、慶應義塾大学からの四代目のコーディネーターを任せられました。

そもそも官能検査とは、人間の五感を用いて製品の品質を判定する検査なんです。センサリーテストとかセンサリーエバリユエーションとも言いますね。「利き酒」はその代表例です。実際に試飲してみても、人が五感を用いて味や品質を確認します。機器による成分分析も進歩していますが、最終的には人間が飲んで判断するんですね。もともと品質管理（QC）の理論はアメリカの統計学者であるウイリアム・エドワーズ・デミングが唱えたんだけど、アメリカでの認知度は低かった。一方、その理論に感動して実践したのは日本人だったんですよ。なので日本は八〇年代頃、最先端のクオリティコントロールの技術を持っていたわけですね。一九五一年から品質管理の進歩に功績のあった団体や個人に授与されるデミング賞の選考が行われていますが、この運営をしているのが、日科技連なんです。それにエン

トリーされる業種は、建設会社や香料会社に食品会社、デジタル機器を扱う会社などさまざまでした。例えば、コピー機やカメラを商品化していく過程で商品のイメージはけっこうあいまいなものです。そのあいまいなイメージに対して複数の観点から必要な要素を測定して、科学的にデザインしていくんです。モデルを総合していく作業は実は多変量解析の非常におもしろい応用分野で、いろいろな分野の現場で使っていくようになったので、ものづくりから販売までのデータをさまざまな企業と共同研究をする機会に恵まれ、自身自身にとっても意義のある実りの多い経験でした。

バブル期を新聞社で過ごす

——大学院ではどのような活動をされていたのですか？

修士課程の活動の二つの大きな柱のうちの一つは官能検査でしたが、もう一つは日本経済新聞社研究所でのアルバイトでした。私が修士課程から博士課程に進んだ八〇年代後半は、バブル経済の頂点にぐわつと向かっていく時代だったんですね。日

本中が金あまりだったし、アメリカ社会学者のエズラ・ヴォーゲルによる『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（ハーバード大学出版局）という日本経済を評価する本が出版されて、日本人がやたら自信をもつてしまっていた時代です。一万円札を振らないと六本木ではタクシーが拾えないという時代でした。日経新聞の社長はそれまで編集局の出身者がほとんどだったんだけど、当時の社長はデータ版顧客という部署の出身でした。なので、調査やデータの整備を非常に重視して、たくさん予算をそこにぎ込んでいました。研究員の人手も増やそうという動きになり、東大・一橋大・慶應・早稲田ぐらいから一人ずつ研究者のたまごを呼んで研究させてみようということになり、たまたま私は、井関先生の紹介でそこに混ざってもらったんです。

神田橋にある研究所のビルに行くと、自分用の机を用意してくれていたんです。部屋には日経新聞本社のIBMに繋がっている大型コンピュータがあり、大学で使うと何秒あたり何円ってお金がかかるプログラムも使い放題。その上定期的な調査をしているデータ量は大変豊富

で、消費者調査あるいは社会調査、景気調査を毎週企画していたので新しいデータも常に入ってきていました。そんな環境で私は興味のある調査や頼まれた調査に関わっていました。調査用の設計にはじまり、データを回収し確認してコンピュータにデータを入れて解析すればいいという状況でした。その後は調査票を作り分析して、論文的なレポートを書く。アルバイトの立場ではありませんが、ひたすらこれを繰り返していたので、これだけの消費者に関するデータを持っている人間は自分以外にいないだろうという実感がありました。この調査から分析までの一連の仕事は多変量解析を使う素晴らしい応用分野であつたので自分のこれまでに培った技術も生きたと思います。多変量解析を使つた応用分野についても世の中に広まっていなかったのも、たくさん講演会に呼ばれたので、たくさん講演会に呼ばれた評価に繋がったりしました。大変ハッピーな時代でしたね。

大学にはほとんど行かなくて、必要があつたらお昼ぐらいに三田に行くんだけど、結局は毎日神田橋に行っていました。新聞記者は晩ご飯の後飲みに行つて、帰ってきてまた仕事をする。私も結局夜中の二時く

らいまでいて、デスクの上に転がっているタクシーチケットの束をもつてタクシーで帰るという生活でしたので、もうずっと入り浸っていました。データを作り、分析し、レポートを書くといったことを博士課程が終わるくらいまでずっと続けていました。

楽しもう、結果はついて来る

——他にもバブルの時代ならではの思い出はありますか。

日経新聞で働くのが楽しかったということもあり、お金はほとんど使わなかったんだよね。贅沢もしなかった。でも、Appleの二〇〇万円のプリンターを買ったんです。博士論文を、ページメーカーを使ってプリンターで出力して提出したら「こんな美しい博士論文は見たことがない。活版印刷みたいだね！」って先生に言われました。当時は手書きが基本だったから、三田ではデスクトップパブリッシングで初めて書かれた博士論文だったと思います。

しかし、八〇年代は「数值的に、科学的に、実証的に」というアプローチが大きく攻撃を受けた時代でも

あつたんです。「本質を見ていない」との批判があつた。その批判はまったくわからない訳ではなかったの

——読者にメッセージをお願いします。

「まず楽しいこと、好きなこと、没頭できることに出会い、そこから発想していこう」というメッセージを送りたいですね。また、最近特に思うのが「いくつになつてもスタートすることができるといふこと。私は五十四歳になつてフェンシングを始めたんだけど、それで良かったのは、体育の授業の中では学生と友人になれたことですね。

SFCの一番の強みは、いろいろな先生の授業を幅広く受けて、それを自分の中で組み合わせられるところだと思う。他の学部では先生は目指すべき目標のような存在だけど、SFCでは自分が新しいものを作るための材料のようなものだということです。SFCに来て「いろいろなことを経験できて良かったです」という学生が多いけれど、それだけじゃなくて本当のコラボレーションを経験してほしい。

（構成…海老澤 秀美）



桑原 武夫

（くわはら・たけお）

総合政策学部教授

専門はマーケティング、データサイエンス、ブランディング、クロスメディア戦略、消費経験論

発行人

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

編集長

坂本 美佳 (看護医療学部4年・宮崎北高校出身)

副編集長

佐藤 彩華 (看護医療学部4年・順天高校出身)

編集スタッフ

樋口 誓一郎 (環境情報学部4年・成蹊高校出身)

海老澤 秀美 (環境情報学部3年・田園調布雙葉高校出身)

秀島 佑茉 (環境情報学部3年・晃華学園高校出身)

田村 萌 (環境情報学部2年・丸亀高校出身)

平澤 茉衣 (環境情報学部2年・葦崎高校出身)

藤井 咲妃 (環境情報学部2年・県立長野高校出身)

植田 陽 (総合政策学部1年・ぐんま国際アカデミー高等部出身)

中村 真優 (環境情報学部1年・Bellevue High School 出身)

湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

國枝 孝弘 (総合政策学部教授)

事務局

田坂 真美

発行日

2017年8月18日

発行所

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

製作・印刷

株式会社ワキブリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。
最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会までご連絡ください。

From Editor

「多様性ってなんだろう?」「インクルージョンってどういうことだ?」といった疑問から、64号の企画は始まりました。

今号の特集テーマは「Diversityの『多様性』」。さまざまなバックグラウンドをもつ人々が同じ社会で暮らし、一人ひとりが豊かに生きていくことができるためにどうすればいいだろうか、そんなことを考える機会になればいいなという想いで企画しました。

打ち合わせをしていると、編集部メンバーが考える「Diversity」もそれぞれ異なっていましたし、取材時にも自分自身では思いもつかなかった新たな考えに出会い、はっとしました。

人の価値観はさまざまです。だからこそ、対話をするすると衝突も生む。私自身もこれまでに多くのグループワークをしました。在籍している看護医療学部での講義では実習での経験談を通して、一方で総合政策学部と環境情報学部の学生とも患者中心の医療についてディスカッションしてきました。どちらの場合も問いに対して正しい解答があらかじめ用意されているわけではなく、いろいろな考えや想いが反映された答えをみんなで導き出したように思います。そのたびに他者の考えや価値観を垣間見ることができました。もしかしたらそのような対話の場で、誰かと衝突を生んでしまうかもしれません。衝突してしまうのは、自分の大切にしている考え方や価値観に触れるような対話だからではないでしょうか。それまでに認識しなかった自分の価値観に気づくことができる、対話の力を改めてREVIEWを通して感じました。このSFC REVIEWが皆さまの話のきっかけとなることを願っております。

最後になりましたが取材に応じてくださった皆さま、REVIEWをお手にとって読んでくださった方、関わってくださったすべての方に感謝いたします。素敵な暑くて熱い夏をお過ごしください。

2017.07.17 坂本 美佳

KEIO SFC REVIEW は
学生編集スタッフを募集しています。

興味のある方は、keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
までご連絡ください。

募集中